

常 照

佛教大学図書館報

55
2007

目次

・ 図書館と私	1
・ 利用者を意識した図書館づくり	3
・ 平成17年度諸統計	5
・ 平成18年度図書館関連委員会委員名簿	7
・ 新収資料紹介『花洛細見圖』(つづき)	(1)

船岡山遠見鏡

色刷木版画『都名所百景』の一。この図の絵師は北水、遠景の船岡山に目をやる遠見鏡(望遠鏡)の筒先をふいに黄色い蝶が横切っていく姿をとらえており、遠眼鏡の中の遠近という構図が面白い。版元の石和は『浪花百景』なども刊行しており、江戸時代後期から明治期にかけての瓦版錦絵などの版元として有名。



●佛教大学図書館蔵

図書館と私

山崎 高 哉



2006（平成18）年4月、私は佛教大学附属図書館長を拝命した。思いがけないお話であったが、子どものころ以来、図書館には随分お世話になってきたので、そのご恩返しができればと思い、お受けした。就任にあたって『佛教大学学内報』にも、これまでの利用者としての経験を生かし、「利用者のニーズに最大限配慮した図書館サービスの充実・向上に努めていきたい」と書いた。はたして、このマニフェストが1年間でどの程度実現されたかは、皆さま方のご判断を仰がなければならないが…。

図書館長としての1年のなかで最も大きな出来事は、昨年の10月に大学基準協会の相互評価にかかる実地視察を受けたことである。それは常照ホールを主会場に、午前10時から午後5時近くまで紫野キャンパス内で行われ、図書館についても約20分間、視察があった。私は大学評価委員会委員長も兼任しているので、当日は朝から緊張していたが、図書館の視察の成否についてはある程度楽観していた。それというのも、本学図書館はあらゆる面で大学基準協会の評価基準をクリアーしていることが分かっていたからである。しかし、どんな質問が出るか分からないので、「ヤマ」をかけて、いろいろ調べた。

なぜ図書館を「成徳常照館」と呼ぶのかという質問が出た。これは想定内の質問で、1934（昭和9）年、佛教大学の前身・佛教専

門学校当時、浄土宗檀信徒上村常次郎氏の遺志を受けたご遺族からの資金提供により図書館が建設され、上村家のご厚意を記念するとともに、「緋書ノ士ハ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」ようにとの意味を込めて「成徳常照館」と命名されたことを答えた。また、和漢書と洋書との割合についても聞かれたが、これも蔵書の「資料区分」のデータを見ればすぐ分かるので、答えるのは簡単であった。ほかに、視察の折、学生諸君が「選書ツアー」に参加して選んだ書籍の展示に、ある委員の方が大きな関心を寄せられ、縷々質問していただいたのは、うれしかった。

昨年の12月末、大学基準協会から送られてきた「相互評価結果（原案）」を見る限り、図書館の施設・設備、図書館サービス、地域との共生、専門員制度の導入等に高い評価をいただき、今後ますます大学の学修・教育・研究を支援する図書館機能の充実・向上に努めたいとの決意を新たにしているところである。

いま一つ、図書館長として対策を講じたいと思っているのは、現在一般に進行中の「読書離れ」「活字離れ」を本学でどう食い止めるかということである。本学でも近年、図書館の年間入館者数は60万人台を保っているが、図書貸し出し数は減少傾向にあるのである。

私事にわたって恐縮であるが、戦中・戦後の厳しい教育・文化状況のなかで、しかも

小・中学校時代を山深い片田舎で過ごした私にとって、学校図書館と学級文庫は—今日と比べれば、比較にならないほど貧弱なものではあったが—私の知的な渇きを癒してくれるかけがえのない場所であった。大学生になり、桑原武夫の『文学入門』（岩波新書）の巻末付録「世界近代小説50選」の完全読破をめざし、次々に大学図書館から借り出し、読み耽ったことも私の懐かしい図書館経験の一つである。また、私のライフワークになる20世初頭のドイツの教育改革者ケルシェンシュタイナーの著作に出会ったのも大学図書館であった。それ以来、日本及びドイツの多数の図書館からどれほどの恩恵を受けているか、計り知れない。

たしかに、メディア環境の激変により、現代の子どもは携帯電話やインターネットでコミュニケーションをとり、テレビやビデオ、DVDなどで多くの情報を取得することができる。したがって、従来と比べて、文字・活字文化に触れ、文字・活字を用いて表現する機会が著しく減っていることは否めない。しかし、2005（平成17）年7月に公布された「文字・活字文化振興法」に言うように、文字・活字文化は「人類が長い歴史の中で蓄積してきた知識及び知恵の継承及び向上、豊かな人間性の涵養並びに健全な民主主義の発達に欠くことのできないものである。」本学図書館も、地域や一般の人々にも開かれた図書館として、読書活動の一層の推進のために貢献したいと考えている。

しかし、大学図書館は何と言っても大学の学修・教育・研究を支える中枢であり、もとより、多様化・大量化している電子媒体による学術情報の収集になお一層努めなければな

らないが、同時に魅力ある書物の購入を計画的に進め、学生・教職員に書物との豊かな出会いの機会を提供することもその重要な使命である。

かつてダンテ、ボッカッチョと並ぶイタリア文学の三巨星と謳われたペトラルカは書物の探索を依頼して友人に宛てた手紙にこう書いている。「金銀、宝玉、豪華な衣服、大理石の邸宅、みごとな耕地、絵画、飾りたてた馬、その他この種のものがあたえてくれるのは、ものいわぬ表面的な快樂です。ところが書物は、われわれを心底から楽しませてくれ、対話し、助言し、あるいきいきとした深い親密さをもってわれわれと結ばれあうのです。しかも書物は、それぞれが読者の心にはいりこむばかりか、ほかの書物の名前をも忍びこませて、相互に欲望をかきたてあいます。」（ペトラルカ、近藤恒一編訳『ルネサンス書簡集』、岩波文庫）と。ペトラルカに限らず、今日においても、志を立て、高みをめざして精神の砦を築こうとする者にとっては、「表面的な快樂」や「黄金への情熱」に身をやつすよりも、「書物への情熱」をいだき、書物を自らの心と人生の扉を開く鍵とし、それぞれの書物自体が展開する魅力とともに、他の書物の魅力をも内包し、両者が互いに増幅しあっている多彩な精神世界に「遊ぶ」ことが不可欠なのである。あわただしく、先行き不透明な時代であるだけに、私は、とりわけ学生諸君に、せめて一冊でもよい、高尚な書物と出会い、その書物との「対話」を心の底から楽しみ、「徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」道を歩み始めていただきたいと切に願ってやまない。

（教育学部教授・やまざき たかや）

利用者を意識した図書館づくり

～目録業務の見地から～

志 麻 克 史

I はじめに

前号『常照』54号において、「満足度80%の蔵書づくりをめざして」と題し、サービス部門担当専門員より図書館の現状報告ならびに利用者個々の満足度向上についての試案を提示した。収書基準の見直し・選書システムの改善などの活動の結果、利用者の満足度60%を得るに至ったと分析した上で、満足度を向上させるためにさらなる収書基準の見直し・見計らい図書の充実・学生を対象とした選書ツアーの実施・現物貸借サービスの開始などの活動を展開することで満足度80%の実現を目指すというものであった。

今回は情報管理部門、特に目録業務担当の見地から現状を分析し、利用者の満足度向上の方策を探ってみたい。

II 書誌情報と所蔵情報の充実

佛教大学図書館の目録業務は、国立情報学研究所総合目録データベース（NACSIS-CAT）

に基づいた書誌情報の整備と、本学独自の所蔵情報の整備の2つに分けられる。

①書誌情報

まず、書誌情報の整備についてだが、佛教大学図書館では図書資料・雑誌資料の言語区分について和書・洋書・中国書の3区分を採用している。所蔵数で主流を占める和書の近刊図書については、これまでも目録業務スタッフによって円滑に書誌情報が整備され、速やかに利用者に還元されてきた。洋書についても和書・中国書と比較してその所蔵数が少ないこともあり、スムーズな処理が行われてきた。

一方、中国書に関しては、各資料を精査するに十分な技量を備えた人材が不足していたこともあり、その処理に必要以上の時間を要したり、あるいは十分な書誌情報を利用者に提供することができていなかった。しかし、2004年度より中国語文献に精通し、かつ目録業務の知識を十分に備えたスタッフによって、中国書整理が飛躍的に促進することとなった。

また、近代中国語刊本に対して、漢籍資料についてもこれまで十分な書誌情報が整備されておらず、分類体系も不完全であったが、2005年度下半期より本格的な整理が開始された。

新規受入の漢籍資料と並行して、文学部資料室に所蔵する同資料の遡及整理も段階的に実施した結果、2006年度中に文学部資料室の全漢籍資料の整理が終了する見通しである。引き続き今後は、過去に受け入れて未整理のままになっていた図書館所蔵の漢籍資料のデータ入力に着手し、佛教大学に所蔵されているすべての漢籍資料について、利用者に高精度の書誌情報を提供することを目指している。

②所蔵情報

所蔵情報の整備については、2005年度からの新システム導入に伴い、これまで各資料の形態（大型図書や地図資料など）で細かく表記していた分類体系を簡略化し、反対に各資料の所在場所を詳細に明示することでスムーズな利用を図った。

特に中国書に関しては、近代中国語刊本と漢籍資料について、前者はN D C分類を、後者は他館にはあまり例を見ない漢籍の伝統的な四部分類法に基づいた分類体系を採用した結果、漢籍資料の特殊性を強調することとなっている。

Ⅲ 今後の課題

以上のような点が利用者に評価され、過半数に満足感を感じてもらえる結果となったと思われる。

とはいえ、現状においても課題は多い。どこの大学図書館でも未整理資料というものは存在し、それは同時に、速やかに処理すべき対象として認識されている。しかし、その数が大きくなればなるだけ、速やかには処理し難いものになっているのが実状である。

佛教大学図書館も残念ながらその例に漏れるものではない。新規受入資料の処理と並行して、これら既所蔵資料の遡及整理も、日々、進めてはいるが、十分に利用者に還元しているとは言い難い。

また、前述した新システムの導入によって、確かに有益な新機能が備わったが、その一方で、旧来の書誌情報が不完全なままで利用者に供しているなどのマイナス面も露呈した。これら書誌・所蔵データの再整備も目録業務担当者の優先的業務の一つと考える。

目録業務担当としてはこれらの課題を処理していくことこそが、利用者の満足度を向上させる唯一にして最大の業務と考えており、それは必ずや利用者の満足度に反映しうものだと確信している。（専門員・しま かつふみ）

平成17年度 諸統計

主題別整理冊数(単行本)

主 題 別	和 書	中国書	洋 書	計
0 類 総 記	1,058	84	16	1,158
1 類 哲 学	1,056	192	150	1,398
(14) 心 理 学	(243)	(0)	(10)	(253)
(18) 仏 教	(459)	(99)	(83)	(641)
2 類 歴 史	1,416	726	187	2,329
(21) 日 本 史	(708)	(0)	(11)	(719)
(22) 東 洋 史	(289)	(661)	(12)	(962)
3 類 社会科学	4,595	143	387	5,125
(36) 社 会 学	(1,325)	(14)	(199)	(1,538)
(369) 社会福祉	(403)	(0)	(35)	(438)
(37) 教 育	(613)	(40)	(23)	(676)
4 類 自然科学	3,102	4	296	3,402
(49) 医 学	(2,758)	(0)	(266)	(3,024)
5 類 技 術	354	8	8	370
6 類 産 業	244	17	8	269
7 類 芸 術	808	121	45	974
8 類 言 語	267	71	74	412
(81) 日 本 語	(100)	(0)	(8)	(108)
(82) 中 国 語	(98)	(69)	(14)	(181)
(83) 英 語	(21)	(1)	(3)	(25)
9 類 文 学	889	382	184	1,455
(91) 日本文学	(731)	(2)	(0)	(733)
(92) 中国文学	(69)	(380)	(11)	(460)
(93) 英米文学	(41)	(0)	(150)	(191)
特 別 資 料	2,620	289	524	3,433
合 計	16,409	2,037	1,879	20,325

注：2005年度に受入登録した通常整理冊数
() 内は内数である。

蔵書数(平成18年5月1日現在)

	内国書	外国書	合 計
図 書	659,662冊	168,356冊	828,018冊
雑 誌	8,630種	2,724種	11,354種

注：図書は、大学全体の所蔵数である。

主題別貸出冊数

利用者別 主題区分	通 学					
	学 部			大学院		
	和 書	中国書	洋 書	和 書	中国書	洋 書
0 類 総 記	4,287	1	1	458	2	1
1 類 哲 学	6,672	4	6	3,132	14	125
2 類 歴 史	4,387	5	1	1,366	25	15
3 類 社会科学	16,041	10	7	1,904	6	29
4 類 自然科学	1,572	0	0	337	0	1
5 類 技 術	876	0	0	50	10	0
6 類 産 業	529	0	0	106	1	0
7 類 芸 術	1,600	0	0	231	15	0
8 類 言 語	616	0	2	116	3	11
9 類 文 学	4,357	5	6	597	19	11
そ の 他	53	8	0	180	1	0
計	40,990	33	23	8,477	96	193

注：利用者別の「その他」には、研究生・研究員・卒業生・事務用利用等を含む。

資料区分別受入冊数

資 料 区 分	和 書	中国書	洋 書	総 計
図 書	19,056	2,089	2,115	23,260
地 図 資 料	4	4	17	25
文字資料（点字）	31	0	0	31
楽 譜（印刷）	308	0	2	310
マ イ ク ロ 形 態	312	0	104	416
静止画像（非投影）	1	0	0	1
映 画	6	0	0	6
録音資料（音楽）	2	0	0	2
録音資料（非音楽）	28	0	1	29
ビ デ オ レ コ ー ド	687	77	36	800
機械可読データファイル	168	19	2	189
合 計	20,603	2,189	2,277	25,069

通 信						教職員			その他			総 計		
学 部			大学院											
和 書	中国書	洋 書	和 書	中国書	洋 書	和 書	中国書	洋 書	和 書	中国書	洋 書	和 書	中国書	洋 書
1,221	0	2	152	0	0	477	5	8	357	4	8	6,952	12	20
2,317	0	9	735	0	18	780	6	109	1,077	19	33	14,713	43	300
1,014	2	0	243	0	19	425	16	3	441	8	4	7,876	56	42
7,488	0	2	643	0	4	740	4	45	652	2	10	27,468	22	97
578	0	0	32	0	0	61	1	0	82	0	0	2,662	1	1
98	1	0	1	0	0	14	0	0	27	0	0	1,066	11	0
71	0	0	9	0	0	44	0	0	13	0	0	772	1	0
295	1	0	13	1	1	132	5	1	184	2	4	2,455	24	6
468	0	3	42	2	45	75	3	12	112	0	8	1,429	8	81
1,400	8	36	261	1	50	218	13	27	260	4	54	7,093	50	184
11	3	0	3	0	0	108	2	0	79	0	0	434	14	0
14,961	15	52	2,134	4	137	3,074	55	205	3,284	39	121	72,920	242	731

平成18年度図書館関連委員会委員

○図書館委員会委員

大東 貢生	(社会学部総務担当主任)	委員長
門田 誠一	(文学部総務担当主任)	副委員長
奥野 哲也	(教育学部総務担当主任)	副委員長
藤松 素子	(社会福祉学部総務担当主任)	副委員長
望月 晃二	(保健医療技術学部総務担当主任)	副委員長
藤本 淨彦	(副学長)	
原田 敬一	(文学部長)	
西岡 正子	(教育学部長)	
広瀬 卓爾	(社会学部長)	
岡村 正幸	(社会福祉学部長)	
濱 弘道	(保健医療技術学部長)	
小林 隆弘	(財務部長)	
山崎 高哉	(図書館長)	
徳森 京子	(図書館課長)	
古川 千佳	(図書館専門員)	
竹村 心	(図書館専門員)	
飯野 勝則	(図書館専門員)	
志麻 克史	(図書館専門員)	

○収書委員会委員

藤松 素子	(社会福祉学部総務担当主任)	委員長
門田 誠一	(文学部総務担当主任)	副委員長
奥野 哲也	(教育学部総務担当主任)	副委員長
大東 貢生	(社会学部総務担当主任)	副委員長
望月 晃二	(保健医療技術学部総務担当主任)	副委員長
山崎 高哉	(図書館長)	
徳森 京子	(図書館課長)	
古川 千佳	(図書館専門員)	
竹村 心	(図書館専門員)	
飯野 勝則	(図書館専門員)	
志麻 克史	(図書館専門員)	

○学部選書委員会

- (文学部) 門田誠一、齊藤隆信、松田和信、太田 修、鈴木文子、西川利文、渡邊忠司、長友千代治、若杉邦子、持留浩二
- (教育学部) 奥野哲也、山田泰嗣、谷川至孝、小林 隆、松瀬喜治、黒川嘉子、石原 宏
- (社会学部) 大東貢生、崔 銀姫、村瀬敬子、萩原清子
- (社会福祉学部) 藤松素子、朴 光駿、丹羽國子、池本美和子、末崎栄司、神谷栄司、中田智恵海
- (保健医療技術学部) 望月晃二、赤松智子、山田恭子、菅野圭子、木戸隆宏、日下隆一、坂口光晴、石井光昭、越智淳子

○浄土宗関係コレクション選定グループ

松永知海、安達俊英、善 裕昭

『花洛細見圖』つづき

古川 千佳

前号に引続き『花洛細見圖』を巻六からご紹介します。本書は全体が十五巻十五冊の構成ですので、三分の一が過ぎたところからになります。

巻六は四条河原夕涼の図を含めれば全十葉が祇園社および祇園会（御霊会）の図と記事にあてられており、祇園会に対する人々の関心の高さをうかがうことができます。

祇園社境内の様子はいまと比べていかがでしょうか。

大日堂 御手洗 日向 太神 荒神 熊野 稲荷 美御前 夷愛宕
毘沙門 後み 衣かけ井 山王 白山 大黒八幡 神輿部屋 元三
大師 祇園御本社 神楽所 楼門 中門 拝殿 二軒茶屋 感神院
本地堂薬師如来 鐘楼 松尾 天神 弁才天 多賀春日 梵天 藏
王 夷 庚申 貴船 白髭 大黒 多賀 大社 竜田 御池 太田
薬神 西門 愛染 薬師 手水場 夷 成就院 東梅坊 西梅坊
などの名称がみえます。

またこの頃の祇園会はもちろん旧暦ですが、五月晦日の御輿洗いつづいて六月七日の先祭りと六月十四日の後祭りにわかれ、二度の巡行が行われていました。現在のように先祭り後祭り合同の巡行になったのは昭和四十一年からとのことですので、それほど遠い昔ではありません。

六月七日の先祭りに並ぶ山鉾は

長刀鉾 占出山 太子山 木賊山 月鉾 孟宗山 傘鉾 芦刈山

函谷鉾 郭巨山 天神山 白楽天山 菊水鉾 山伏山 傘鉾 庭鳥
鉾 飛天神山 蟠螂山 保昌山（花盗人） 琴破山（伯牙山） 放
下鉾 岩戸山 船鉾 が、
六月十四日の後祭りには

橋弁慶山 黒主山 観音山 鈴鹿山 淨妙山 役行者山 八幡山
鯉山 鷹山 船鉾（大船鉾）が並んでいます。

先祭りの船鉾は出陣の船、後祭りの船鉾は凱旋の船です。凱旋の船鉾の本体は蛤御門の変で焼失しましたが模型、懸装品が鷹山とともに現在休み山として宵山でのみ公開されています。休み山にはこのほか布袋山をご存知の方も多いかと思えます。天明の大火で焼失したといわれていますが、なぜかこの細見圖に姿が見えません。

山鉾巡行のほか六月七日、十四日両日には
雑色の行列、六人の棒の者、七度半の遣い、弦召（つるめそ）、山伏の行列、牛頭天皇、八大王子、少将井の行列などが見えます。

巻七には安井金比羅宮を筆頭に東山にならぶ神社仏閣が名をたらねていますが、ちょっと目を引くものに相撲力士の取り組みがあります。そのうち荒川團藏、竹熊弥太八、今川三太左衛門、棧シ木曾之助、荒砂長太夫、唐竹茂次之丞、錦龍田右衛門、立山利太夫、松山左五左衛門、大山次郎右衛門は元禄・宝永頃に活躍し、三役（大関・関脇・小結、この時代まだ横綱はない）に付いた力士でありました。

卷八には豊臣秀吉によって南都東大寺に倣って京の大仏建立が行

われたものの、大小の地震によって造営と崩壊を繰り返してきた方
広寺の再建された大仏殿の姿が描かれています。寛文年間の地震の
あとの仏の修補について近頃の出来事として語られておりますが、
その大仏殿（現在の京都国立博物館のあたり）も今はなくなってしま
いました。そのほか三十三間堂、智積院、泉涌寺、東福寺、伏見稲荷、
藤森、深草祭など現在も観光地としてにぎわう名が多いようです。

卷九には寺領二千三十石の東寺をはじめとする大寺院が並んで
いますが、もともと紙数を割いているのは寺領四十石の壬生寺です。
代表的な演目が紹介された壬生狂言の記事は人気も高かったのだし
ょう、やはり上下二段取りです。

卷十は寺数としては本国（圀）寺、西本願寺、東本願寺の三寺で
すが、本国寺を定宿としていた朝鮮通信使の様子がいきいきと描か
れています。江戸時代の朝鮮通信使の来日は都合十二回、そのうち
第七回（正使・尹趾完）の天和二（一六八二）年の記事が紹介され
ています。当時堀川五条のあたりにあった本国寺は朝鮮通信使の定
宿となっていました。定宿といっても鴻臚館（こうろかん）とある
ように外交、交易の迎賓館ともいうべきところでした。本国寺境内
の図に付して唐人来朝付曲馬乗の図に六葉も割かれています。

十数年に一度お目にかかれる外国人の行列ですからとても興味
津々の記事であったことでしょう。実際の使節団は朝鮮人ですが、
当時はアジア系外国人を総称して唐人とよぶことが少なからずあっ
たのでそのような見出しが付いています。これも上下二段取りで、
上段に通信使の隊列を、下段には鴻臚館内に座した様子および随行
の曲馬乗の技と見物の様子が描かれています。なお、このなかに
「唐人来朝の年より今寶永二年まで・・・」の一文があり、『花洛細

見圖』が宝永二（一七〇五）年頃に成立したことがわかります。

卷十一には五条天神、因幡堂および海佛、御影堂、若宮八幡、建
仁寺および木遣り、四条芝居小屋が紹介されています。建仁寺木遣
りの図では開山の禪師榮西と力を出すときのかけ声の由来について
述べられ、芝居小屋ではこれまた上下二段取りの三葉に都万太夫座
（初代坂田藤十郎の居た小屋）の入口付近や観客席、舞台の様子が描
かれています。本来、向こう一年間の出演役者のお披露目であった
顔見世の図では、歌舞伎の年度始めが十一月一日であったことがわ
かります。現在南座の顔見世がきりのよい十二月一日ではなく十一
月三十日から始まるのはこの名残です。また芝居小屋では歌舞伎だ
けではなく、人形遣いや軽業など様々な見せ物も行われていました。
卷十二には誓願寺、六角堂および立花、極楽寺、神泉苑および五位
位鷲、二条城と武家礼儀が紹介されています。神泉苑に降り立つ鷲
に与えられた爵位のご事は謡曲にもなっています。

卷十三には上御霊、下御霊、草堂、聖護院および山伏峯入が、卷
十四には相国寺、妙顯寺、大徳寺、大宮、今宮、七野社、引接寺
（千本閻魔堂）が描かれています。この巻に描かれている地は本学
の周りでとても身近なところですね。

最後の卷十五は「風流絵本出来之分」として本書の版元である寺
町通の繪本書肆・金屋平右衛門の出版広告一葉で始まっています。
この巻には北野社、観世一代能、平野社、鹿苑寺、等持院、龍安寺、
妙心寺とつづき、目録（目次）にはない御室仁和寺で締めくくられ
ています。

末筆ながら、本学文学部長友千代治教授には数知れぬほどご教示
いただいたことをご報告するとともに深く感謝申し上げます。

（首席専門員・ふるかわ ちか）

【六之巻】

「祇園社」

清和天王貞観年中に山州愛宕郡八坂の郷にはじめて鎮座也
 きおんの社領百六十石余
 是より東丸山長らくし さうりんし東本願寺御はか所なとへの道すじ
 此西東をきおんはやしといふ 本名祇陀園なり

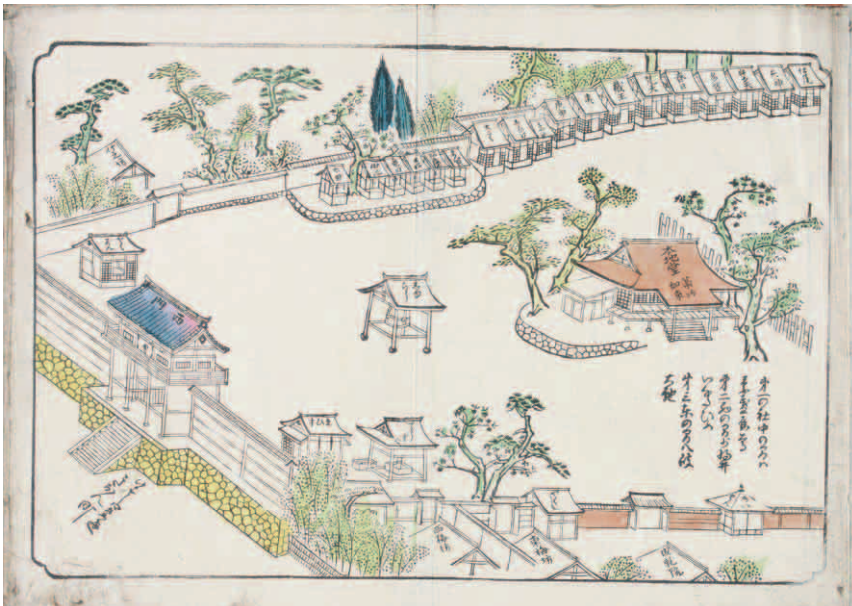


此うしろみな
 くきおんは
 やしといふ
 ちおんあん三
 条なとへぬけ
 道あり

第一の社中の間は素戔鳴尊 第二西の間少将井いたひめ
 第三東の間八岐大蛇
 此すし四条通きおん町

「祇園社つづき」

※原文には多数のルビが振られているが、本号も紙幅の都合で割愛させていただいた。



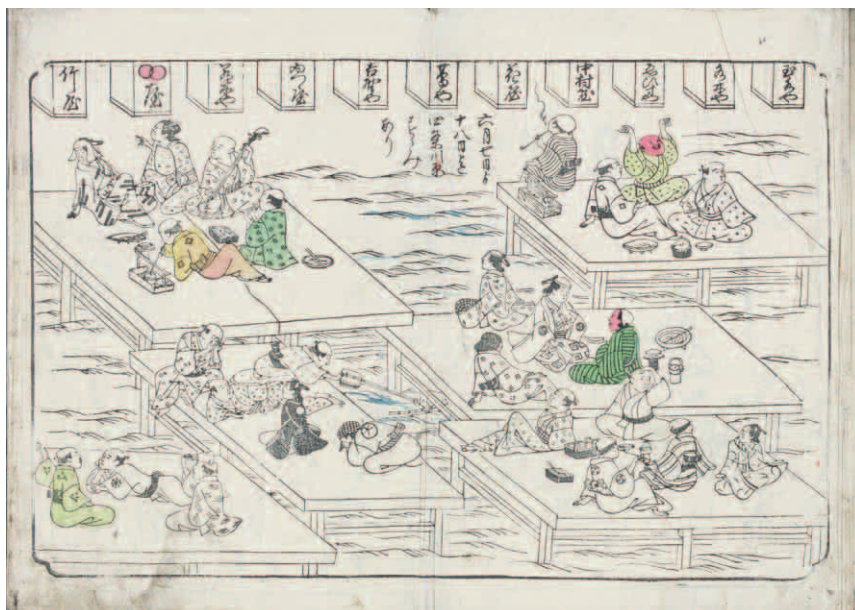
みこしはらひ

五月晦日の夜みこし一社大和大路迄出し奉り水をそぐ



「夕涼」

六月七日より十八日迄四条川原すゝみあり



〔祭禮付山鉾〕

(上段)

六月七日御出

長刀鉾

占出山

なきなたは三条小かち宗近か打たるつるき也
此なきなたあまりれいけんあらたなるゆへ今のは法橋いつみ
のかみ来金道か作にとりかへてかさる也
これは神功皇后三かんをしつめんために松ら川にてあゆをつ
りてうらなひとし給ふてい



太子山

六かくとうの
はしめははや
しなりしを太
子はたのまも
りかけをきて
ゆあみしたま
ひし故事也

木賊山

伸正の哥のと
くさかるその
はらやまのこ
のまよりみ
か、れ出ル秋
のよの月とい
ふ哥の心也

月鉾

孟宗山

二十四孝のま
うそうの故事
也 たかなな
山ともいふ

(下段)

六月七日さいれ
い
同十四日 同前
さうしきのきや
うれつ

〔祭禮付山鉾つづき〕

(上段)

せんぢやうしのかさぼこ
あしかり山
函谷ほこ

みぶよりはやしかたのものどもいづる
あしかりのうたひの心なり 古今著聞に出る也
もろこしのじとうが故事より出たり はうそがおとりを
かたどる

郭巨山

二十四孝のくわつきよが故事也 世にかたほり山といふ



天神山

(下段)

六人のぼうの
しや
七どはんのつ
かひ
これよりつる
めそのぎやう
れつ

「祭禮付山鉾つづき」

(上段)

白樂天山 てうぐわせんじのらくてんとほうもんのてい也
 菊水ほこ もろこしのじとう山にすてられし時ほけきやうの四句のも
 山ふし山 んを菊のはにかきたる故事也
 かさほこ じやうざうきそのみねいりのてい也
 みぶよりいづる



庭鳥ほこ

これは大江
 のまさひら
 に清少納言
 かよみてお
 くりし夜を
 こめて鳥の
 そらねはは
 かるとももの
 哥の心を作
 れり

(下段)

じんめ
 真福寺
 竹之坊
 法興院
 三人かく年

「祭禮付山鉾つづき」

(上段)

飛天神山 風ふかはの御神縁によりてつくしまて梅のとひたるてい
 かまきり山 たうらうか斧をもつてりうしやにむかふか如しといふ齊
 の莊公か故事也
 花ぬすひと 保生(昌か?) 式部が大内の梅をぬすみしてい也
 琴破山 伯牙か知音といふ故事より出たり



放下鉾

世にあほう
 ほこといふ
 人形たなに
 はうかしの
 人形あり
 岩戸山
 あまのいは
 とのてい

(下段)

山ふしきやう
 れつ
 本願成就院

「祭禮付山鉾つづき」

(上段)

六月七日の山鉾の見送り

舟鉾

是は神功皇后三かを退治のため出陣のてい

鬼はわたづみの神 かんしゅまんしゅをたてまつるてい也

六月十四日山の次第

橋弁慶山

よしつねと弁慶五条のはしにて主従のけいやくせし時の故
事也



黒主山

世にさいきやうさくらともいふ 是はつらゆき古今の序に大どもの黒ぬしが哥をひはんせし詞より出たり

観音山

これはふだらくの六くわんおんの内やうりうくわんおんのごうにてゑしんのそうづのさく也

鈴鹿山

すゝかの立ゑほしといふ鬼をたいちのてい

(下段)

御神劔

第一 牛頭天皇すさのおのみこと也

「祭禮付山鉾つづき」

(上段)

淨妙山

此山は宇治川のかせんの時つゝゐのしやうめうかかしらヲ

おさへーらいほうしかこへたるていなり

ゑんの小角かつらき山にて鬼神をしたかへ給ふてい

役行者山

八まん山

りうもんといふたきへこひののぼるてい



鷹山

世に樽おひ

山といふ

たかのゝて

い也

舟鉾

しんぐうく

はうぐう三

かんをたい

らげ帰朝の

てい

(下段)

第二 八大わ

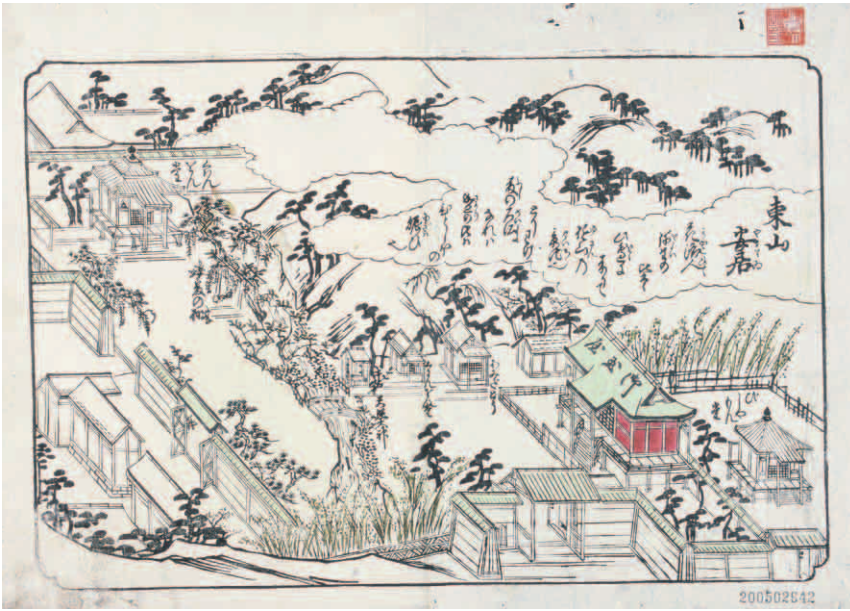
うし

第三 少将井

【七之巻】

東山安居

花洛人弥生の比は此邊に來りて遊山の景地也 とりわけ藤の名所なれば盛の比はひとしほの賑ひ也



高臺寺

寺領五百石

慶長年中に太閤関白秀吉公に北の政所こんりうぼたい所也はじめは洞家今は柴家にて建仁寺の末寺なりいにしへ自然居士すまれたる雲居寺の旧跡なりさきには淨藏貴所の住所なりけりとかや



八坂の塔

此さとのいろあるむすめさま／＼のしなをつけ
おもひ／＼にふりつけをたしなみまけしおとらしと
をとる事なり



霊山正法寺

寺領廿三石五斗

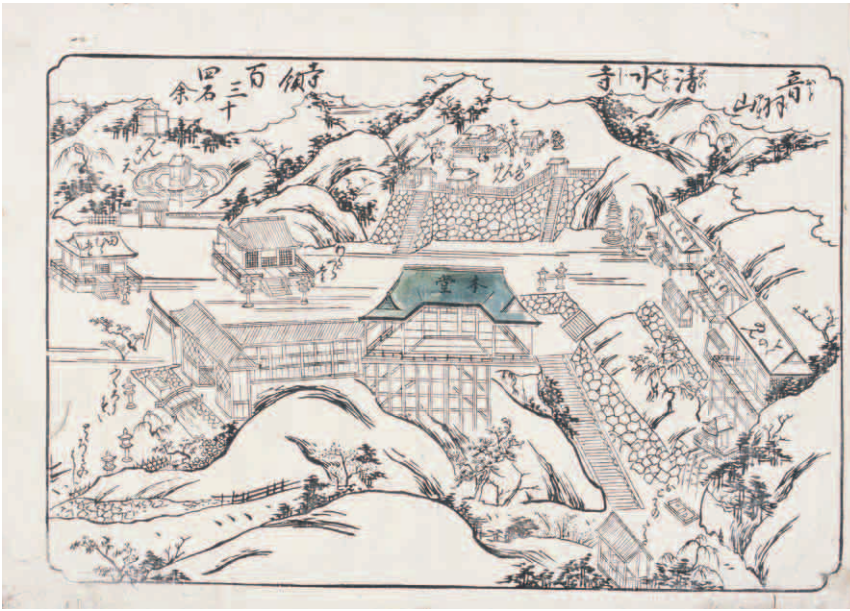
傳教大師の開基 中興國阿上人 此上人は大ぼだい心あり じひふかく
伊勢大神宮へ足駄はきて日参す ある時道中に女の屍ありけるをあはれ
みてうづみ通り給へり かの女は太神宮化して上人の心をためし給ふと
なり 上人重穢のおとがめを恐れ下向せんとし給ふにくるしからずとつ
げありければすぐに参宮ありし 此故に参宮の人は首途の前日此上人に



参りぬれば忌
あるものもの
がるゝとぞ
此山の坊舎は
惣て都人の會
合に借さしむ
事日夜をわか
たず
本尊阿弥陀佛
ましますにつ
ことわらい給
へる御口より
白き園の見ゆ
るゆへに世に
園佛と号す

音羽山清水寺

寺領百三十四石余



清水寺内

弘仁天皇の御宇宝龜十一年の草創、えんちん上人、灵夢によりて造営といふ又ある。せつに田村將軍大同二年しゆくぐはんによつて私宅をこぼちわたして、こんりうともいふ。本尊楊柳くはんを、ん奥院千手くわんおん地主ごんげん本堂のうしろ鎮守也。

其比阿べの高磨むほんせしかば、田村丸ちよくをうけていくさにむかふに、たむら丸の陣中にうつくしき法師とうるはしき男と二人あらはれて、きの



矢をひろふて田村丸にあたへ賊軍を追まくりければ、つゝろに高丸うたれ侍べりかいぢんの後、宝殿をひらき見るに、びしやもんちそうの木像、矢疵刀疵有、いよく信心をおこし帝に奏して、勅願所となせりと云。

清水地主権現祭

此まつりは四月九日なり いにしへ白山通五条の北に御旅所あり
今は経書堂のまへにみこしをすゑ奉るはおたび所のこゝろ
なるへしや



六道珍篁寺

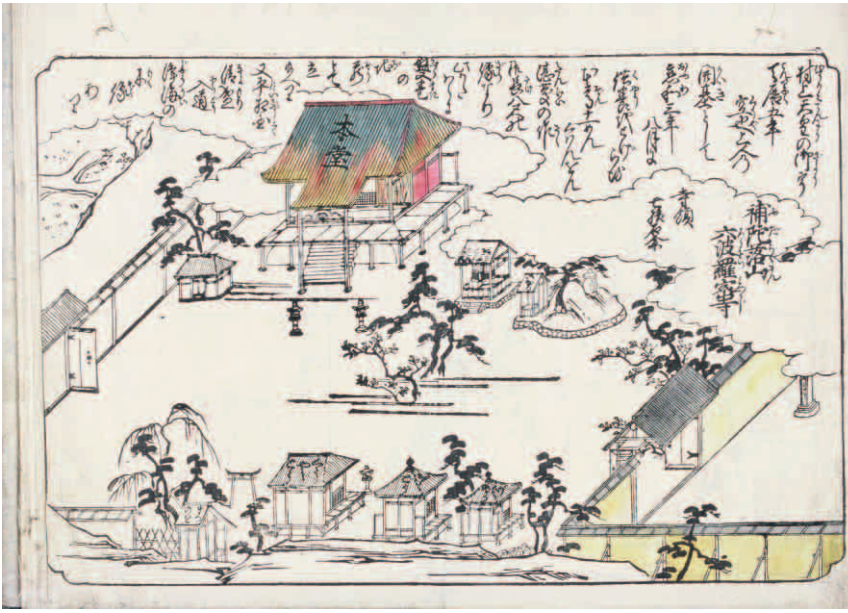
としこのの文月九日十日にしはかならず諸人此ところにさんけいをなし
かうやまきをかひむかへかねをつきてせうれうをむかへてかへるといひ
ならはしたり
此ことおのゝたかむらぢんじやなりけるによりていつもこゝにきたり給
ひて此ところよりめいとへかよひたまひけりとかや
今にくんしゆするは此ゆへなりとぞ



補陀洛山六波羅密寺

寺領七拾石余

村上天皇の御宇天曆五年空也上人の開基として應和三年八月に供養をとげらる
 本尊十一めんくはんをん湛慶の作御長八尺の像なり
 此かたはらに曼卷の地藏とて立給へり
 又平相国清盛入道淨海の木像あり



「相撲」

(上段)

あら川團藏 竹熊弥太八
 今川三太左衛門 かけはし木曾之助
 あら岩龍之介 荒砂長太夫

(下段)

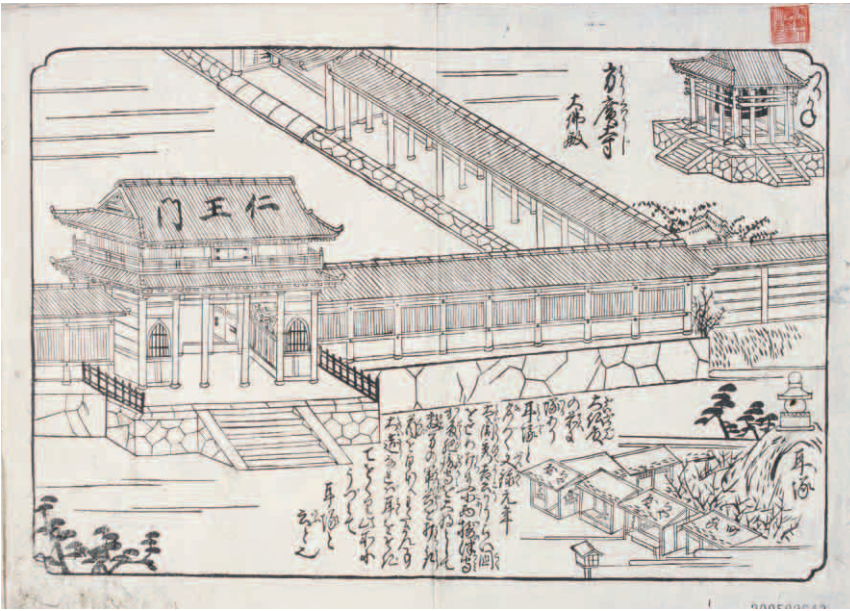
唐竹茂次之丞 錦龍田右衛門
 立山利太夫 松山左五左衛門
 大山次郎右衛門
 胴つき ねぢ右衛門



【八之巻】

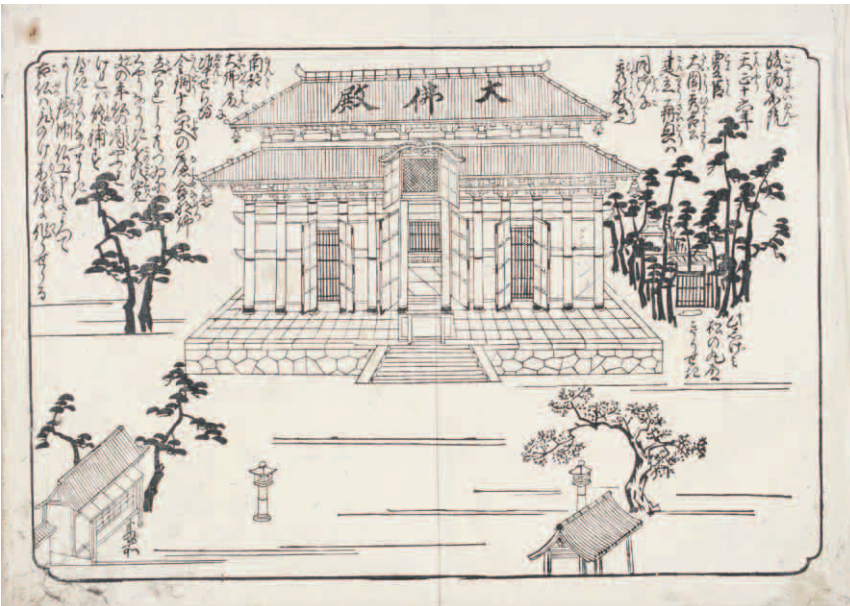
方廣寺大佛殿

大仏殿の前に塚あり耳塚と名づく文禄元年太閤秀吉公かうらい國をせめ打ち給ふ小西撰津守加藤肥後守を大将として数万の軍兵を打取首を日本へわたさん事大造なれば耳をそぎてをくり此所にうづみて耳塚と云と也



〔大佛殿つづき〕

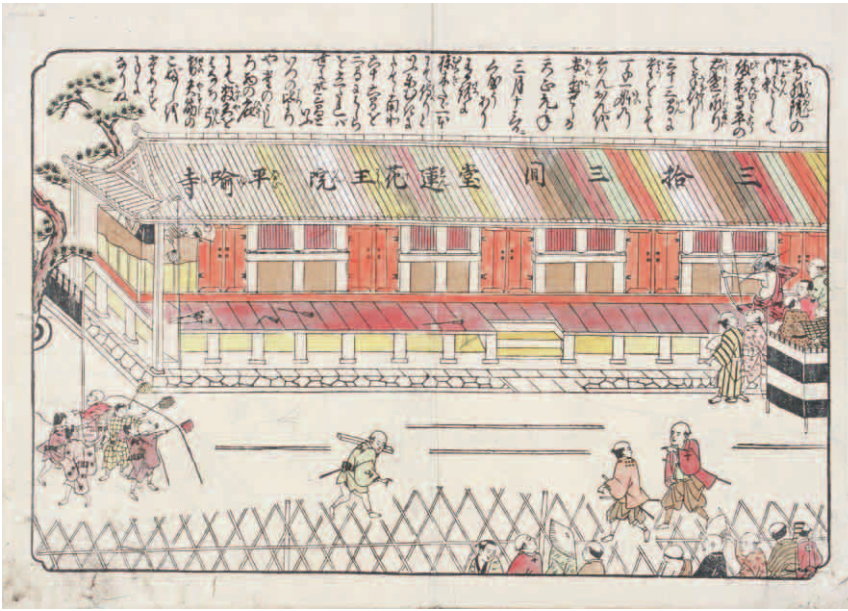
後陽成院天正十六年豊臣太閤秀吉公建立 再興は同御子秀頼公也
南都大佛殿に準ぜらる 金銅十六丈の盧舎那佛立られしか共つゝるに
くやうなかりき 近頃寛文の年仏の肩やぶれければ修補すべき事はかな
ふましきよし鑄師仏工申によつて古仏は取のけ 木像に作らせらる
此しげみ松の丸殿きうせき



【三十三間堂】

鳥羽院の御願として備前守平の忠盛承りて奉行し三十三間に堂をたて一千一鉢のくはんおんを安置せらる

天正元年三月十三日にくやうあり 有説に棟木たゞ一本にて侍りといふ東むきにたて、南北六十六間を二間にはしらを立たれば世に卅三間といふ 一つの比よりや堂のうしろ西の庇にて数矢をはなち弓勢矢筋のこぶしをためす事になりぬ



【智積院】

寺領五百石

慶長年中豊臣秀吉公こんりう妙心寺の南化和尚開祖として祥雲寺と稱すその、ち紀州根来の覚鑊上人の祖流として真言寺也 院主は学智高德の人をえらひて学寮の僧にしなん講肆をもつはらす



泉涌寺

寺領六百八十一石

齊衡三年の草創 法輪寺と号す 左大臣緒嗣公の造立
其後順徳院の御宇建保五年大和守信房 正法寺の俊仍開祖として
仙遊寺とあらため後に泉涌寺となづく
再興後鳥羽院 禅律真言を兼ねる



恵日山東福寺

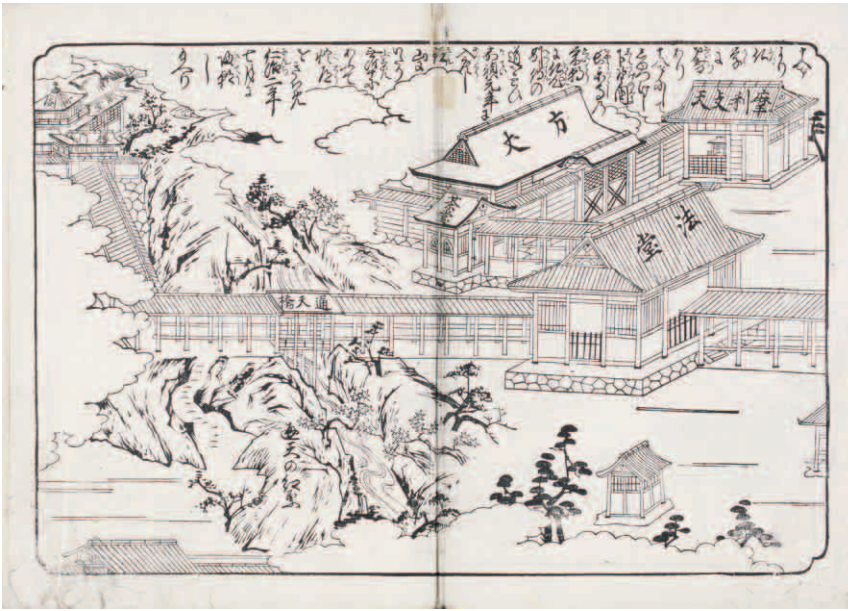
寺領千二百十四石

四条院の御宇延應元年九条道家公これをさうく
かいさん聖一國師
聖一は法の諱は弁圓 字は圓尔と号す するがの國墓科と
いふところの人なり



【東福寺つづき】

十五才より仏学に才智あり 十八才にしてしめつけし下野國長樂寺の榮朝に仏心別傳の道をとひ嘉禎元年に入唐し經山にいたり無準にあふて悟道をきはめ 仁治二年七月に歸朝し給へり



東福寺開山忌

毎年通天橋の紅葉の比は開山聖一の忌日とて十月十六日に法吏ありもみぢのさかりにしていつも此所につきぬながめの興あり



稲荷

社領百六石

元明天皇和銅年中に此神始て伊奈利山に現す
其後空海東寺をこんりうせし時門外に稲を荷る翁にあひて
番匠の餉をまゐらせらる いねをになへるゆへに稲荷とい
ふとなり



稲荷祭

此まつりは毎年三月午の日に御旅所へ神輿を出し奉り
同四月卯の日祭礼の儀式あり 氏子の若者共大母衣を負
強勢を祈る其の外ねり物やくの美をつくし
神慮をすゞしめ見物人の一興をもよほすとかや



藤森

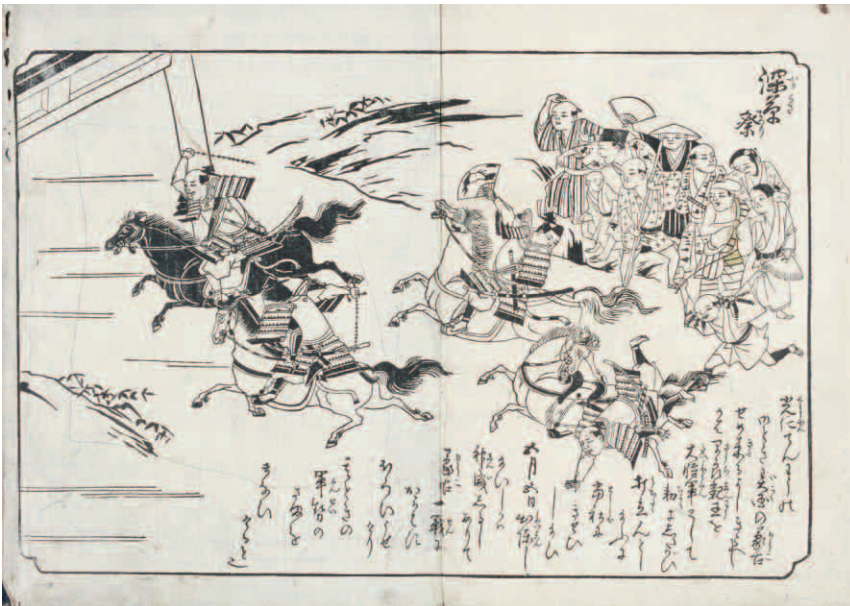
社領二百石

稱徳天皇神護景雲に山城國に造宮
天平宝字三年に崇道盡敬皇帝と追号あり
親王の妃に大夫人と贈追あり
祭礼は五月五日也



深草祭

光仁てんわうの御とき異国の蒙古せめ来るよしきこへしかは
早良親王を大將軍として勅にしたがひ打立んとし給ふに當社に
きせひし給ひ五月五日出陣し給ひしかは神威しるしありて
蒙古一戦におよはすほろひうせけり
其ときの軍勢のさまをまなひけると也

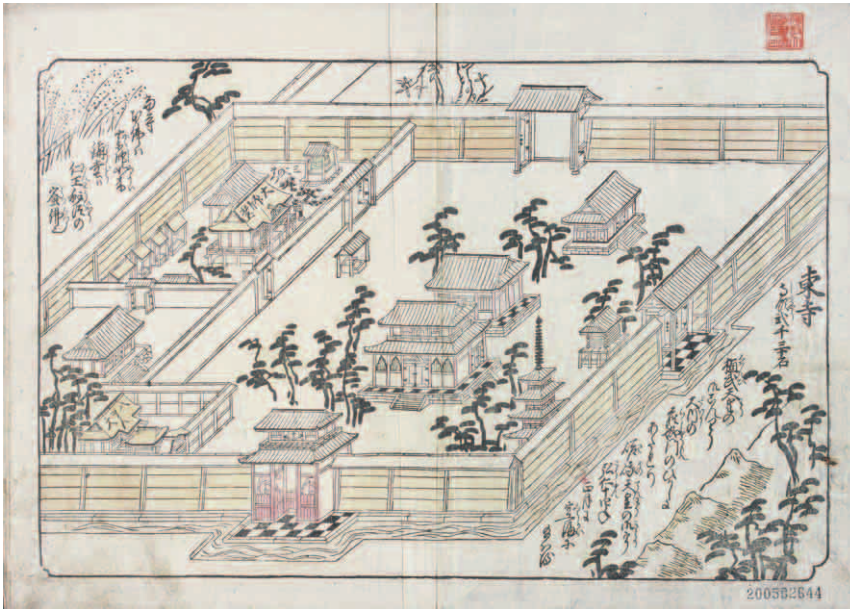


【九之巻】

東寺

寺領貳千三十石

桓武天皇の御こんりう 大内の羅城門のひかしにあたれり
嵯峨天皇の御宇弘仁十四年正月に空海に給はる
當寺本佛は藥師如来 講堂は仁王秘法の蜜佛也



大通寺

寺領二百八拾石

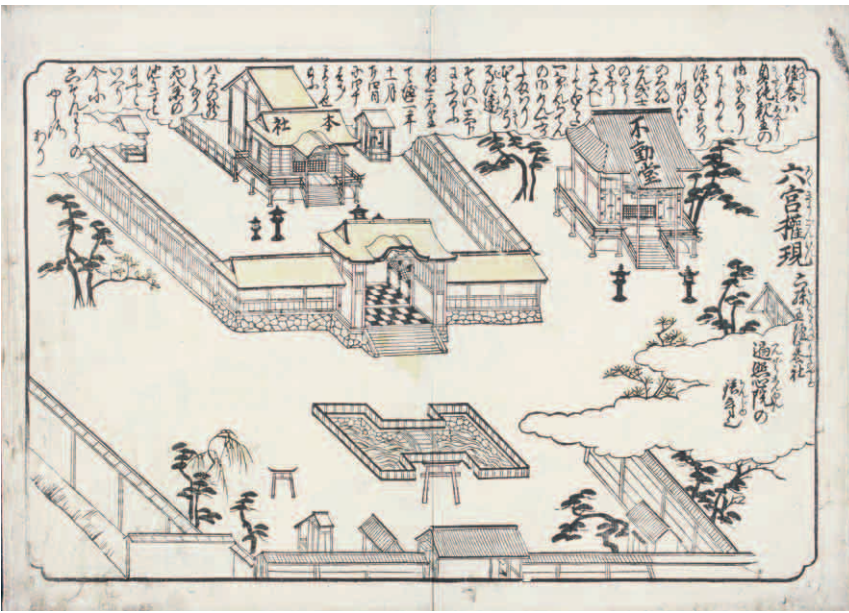
源実朝公北の政所二位の尼はじめてこんりう
さねともは霨が岡社参の夜悪禪師公曉にころされ給ふ
御臺は御飭をおろして此所に住給ふ よつて俗に尼寺
と号すといへり
此庭絶景の地也



六宮權現

六孫王經基社 遍照心院の鎮守也

經基は貞純親王の御子なり はじめて源氏を給はりし時日本の大將ぐん武士のとうりやうたるべしとて白はた一ながれらてんの御けん一ふりたまはり 本より弓馬に達しそのい天下にふるふ
村上天皇天徳二年十一月廿四日に四十老才とならせ給ふ八尺の龍となり西八条の池にすみ給ふといへり今に六そんわうのやしるあり



壬生寺

寺領四十石余

稱徳天皇の御宇鑑真和尚のかいき 往古は律院にして西大寺派也
今は真言の僧これを守 寺に鑑真の像あり あやまつて夜叉神と云
當寺の名四つあり 小三井寺 宝幢三昧寺 壬生寺 地藏院



嶋原體

(3葉分欠落)

「狂言」

(上段)

此寺のきやうけんのはしめにならず猿をまねひて
つなわたりをする事壬生寺にかきる故ありとそ



(下段)

おけとりのお
んなを道心者
のみそめてさ
ま／＼くとき
おとして妻と
するをはしめ
の妻ねたみて
うはなりする
てい也
あさひなめい
とへゆきて鬼
ともをいさめ
系んま王にわ
ひことさせる
てい也

「狂言つづき」

(上段)

こんくわいのきやうけんをやつしてきつねつりを
わなへかゝらせきつねはかへるていをする也



(下段)

ゆたてするま
ねをきやうけ
んにやつして
さま／＼のた
うけあり
かきさいにん
といふきやう
けんをやつし
てさま／＼お
かしきしよさ
をそへたるき
やうけん也

『狂言つづき』

(上段)

さとうのねうはうをさるひきにとられさとうは
わかつまとおもひてさるをひいてかへるてい

あふひのうへの能をやつしたるきやうけんなり



(下段)

なわなはいとい
ふきやうけん
やつしたり
たんなのもた
せたるさくら
又こしのかた
なをぬす人に
とられけるを
たんな見つけ
てとらへける
をしはらせん
ためににはか
にわらをうつ
てい也

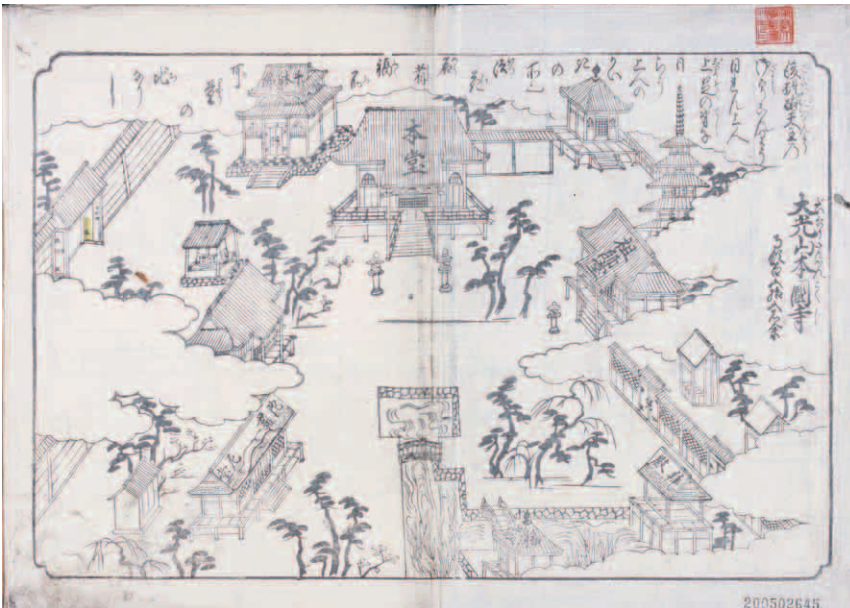
さいにんを見
つけおにとも
いろくさい
なむ所へちさ
うぼさつたす
け給ふてい也

【十之巻】

大光山本國寺

寺領百五拾五石余

後醍醐天皇の御宇こんりう 日れん上人上足の弟子
日らう上人のかいきの所也
法花名者 福不可量の地なりし



〔唐人来朝付曲馬乗〕

(上段)

朝鮮人日本へ来朝の事 数度なりといへともとりわき
ちかきとしのためしをいは、天和二年七月に我が朝に
使をつかはしてさまぐの寶をみつきにさゝく
しはらく洛陽西ほり河



(下段)

徒事ほくけい
しゆん
副使りげんか
う
正使いんとく
わん

〔唐人来朝付曲馬乗つづき〕

(上段)

本國寺を鴻臚館として異朝人をとめてなくさましむ
それより江戸にくたり台命をうけてつかれをやすめしめ
給ふうち江戸つめの



(下段)

唐人来朝の年
より今寶永二
年まで二十四
年になる
詩にも胡兒十
歳にして能馬
に乗とつくり
しことく
今この朝鮮人
も馬にのる事
をよくたんれ
んして此たひ
の

〔唐人來朝付曲馬乗つづき〕

(上段)

大名におほせありて武藝弓矢のたつしやをくらへあるひは
弘文院の儒者 洛陽五山の禪僧詩人をめしあつめて詩を
しよさにもさま／＼のきよくのりをして御めにかけける
むまにのりなからむまのしたはらをくゝる

(下段)



〔唐人來朝付曲馬乗つづき〕

(上段)

つくらせ哥をよませおの／＼学文のほとをためし
むまのたつなをはなしてかけいたすうちに
すつくりとたち
むまのかける内にすぎたちする

(下段)



「唐人来朝付曲馬乗つづき」

(上段)

かすくの御もてなし さまくの御ほうひともありければ
異国のものとも大によるこひ

(下段)

むまのかけるうち地におとしたるあふきをひらふ
むまのかけるうちうかへりする



「唐人来朝付曲馬乗つづき」

(上段)

さまく御れのこゝろを詩につくりてさしあける
すなはちその詩哥をかきたる書を筆談となつて世におこなはる

(下段)

むまをたゝせてのりたる人よここにたつ
そのほかさまくのきよくのり筆につくしかたし



西本願寺

寺領四十石

正親町院の御宇天正十九年にはじめてこんりう
かいさんは親鸞上人也俗姓藤原氏太織冠十八世の孫
皇太后宮大進有範の子也
龜山院勅筆を賜て大谷山本願寺と号す
第十一代顕如上人のとき門跡になされしといふ



東本願寺

正親町院御宇天正十八年にこんりう

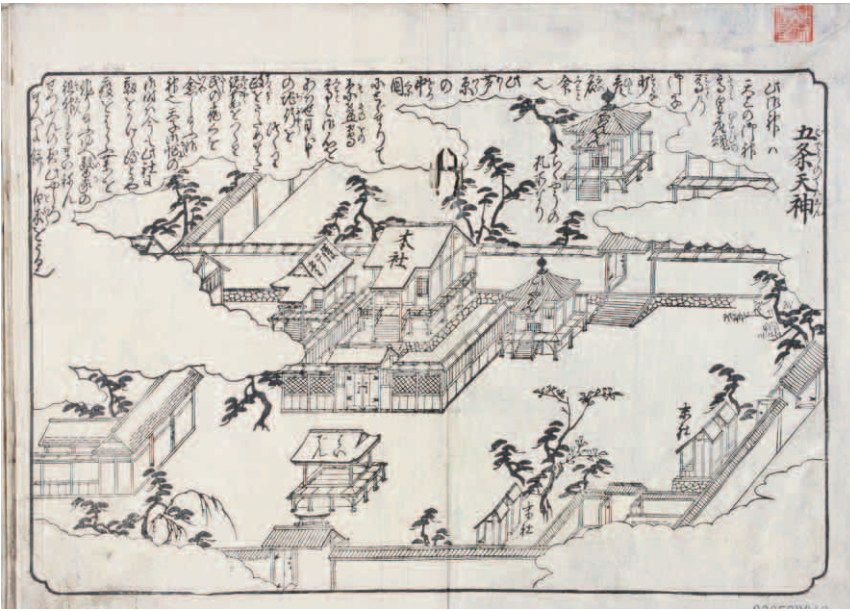
本は一寺にて侍しをしんらん上人より十一代けんによ上人の
室は細川はるもとのむすめ也此人しさいありて太閤ひでよし公に
訴て教如上人を隠居せしめらるのちに東照權現これを非分に
おぼしめし東ほんぐわん寺をとりたて寺内御寄附あり
このゆへに教如上人は東本願寺中興のかいさんとす



【十一之巻】

五条天神

此御神は天上の御神高皇産魂尊の御子少彦名命也
此芦原の中國にとまりて素盞鳴尊と御心をあはせ日本の地行をつくり
政をさためまた諸葉をつくり民の病くを癒し給ふ御神也 天子御悩の御
時は今も此社に靴をかけらるとかや

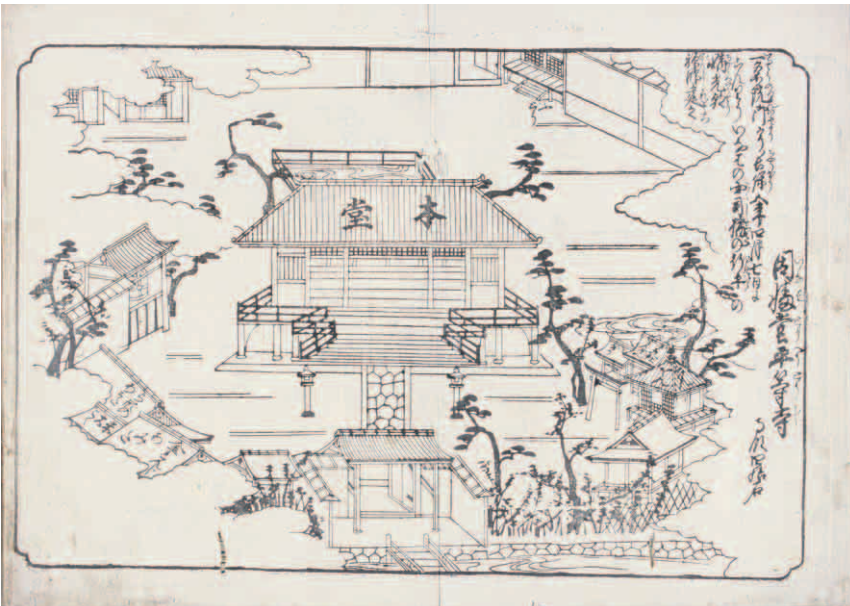


疫をはらふ薬
を作り給ふゆ
へ醫家の租神
とす まいね
んせつぶんの
夜此やしろま
へに餅白朮を
うる也
らくようの札
所なり

因幡堂平等寺

寺領四拾石

一条院御宇長保五年四月七日にこんりういなばの國司橘の
行平の嫡光朝禪師建之



〔海佛〕

此やくし如来の事人王六十六代のみかと一条の院の御時長徳三年
 になはの海よりやうしのあみにかゝり此によらいを
 引あげ奉れり そのゝちいなはのくによりみやこへとひ来り給ひ
 たちはなのゆきひらの御たちにうつり給ふ
 いまのいなはやくしと申これ也



みゑいたう

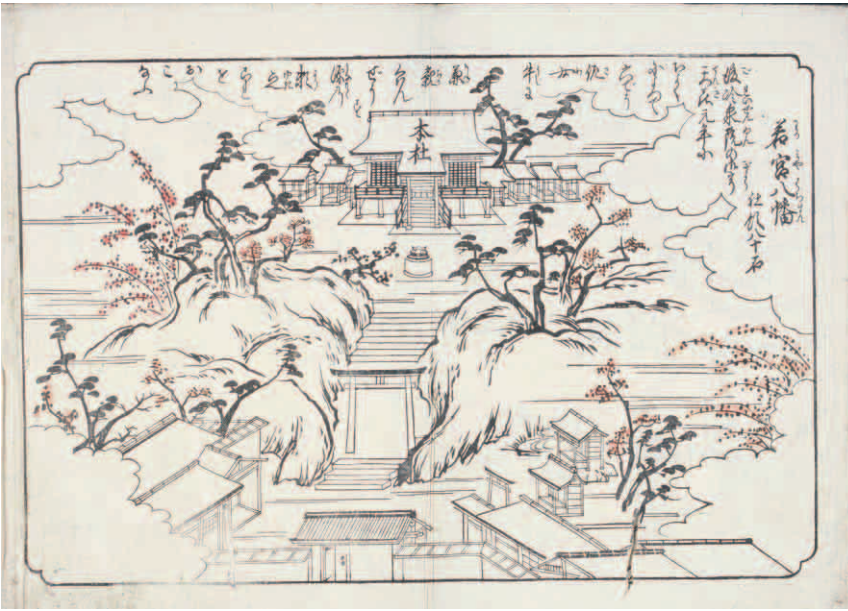
あふきをおりて身をたすくるたねとし
 おとりねんふつをつとめとする也



若宮八幡

社領八十石

後冷泉院の御宇天喜元年にちよくによつて六でう佐女牛に兼親くはんぜうす源の頼之これをおこなふ



東山建仁寺

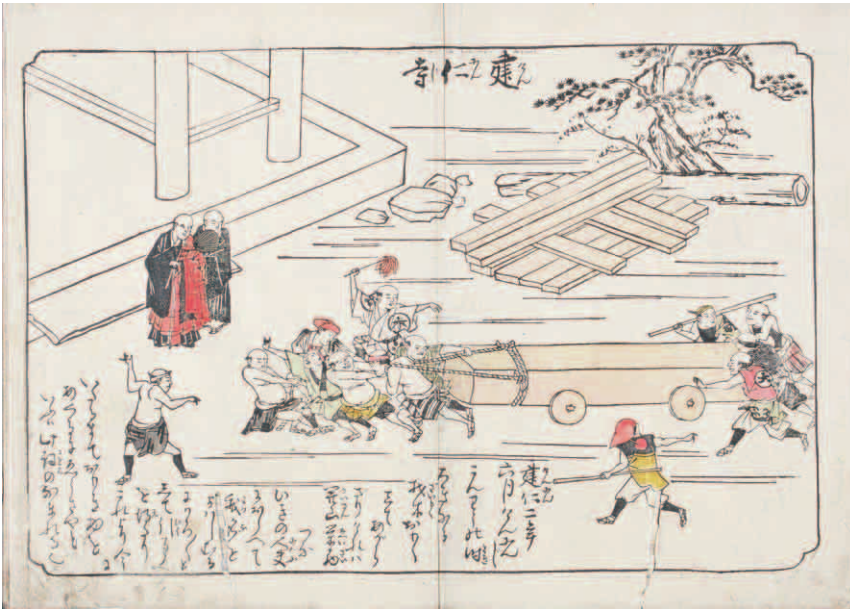
寺領八百八十三石余

土御門の院の御宇建仁二年征夷大將軍源賴家公こんりう榮西禪師の開基なり
ゑい西は備中國きびつ宮の人なりたいたいにやどりて八月にして生る十四才にして出家し仁安三年夏四月に入宋しその秋九月に帰朝



建仁寺（木遣り）

建仁二年六月けんにんじこんりうの時大きな材木おもくしてあがらざりければ開山榮西つなひきの入夫におしへて我名をよはしむるにかるくとして引事を得たりこれより今にいたるまでおもき物をあくるにゑうさやといふは此詞のなまれる也



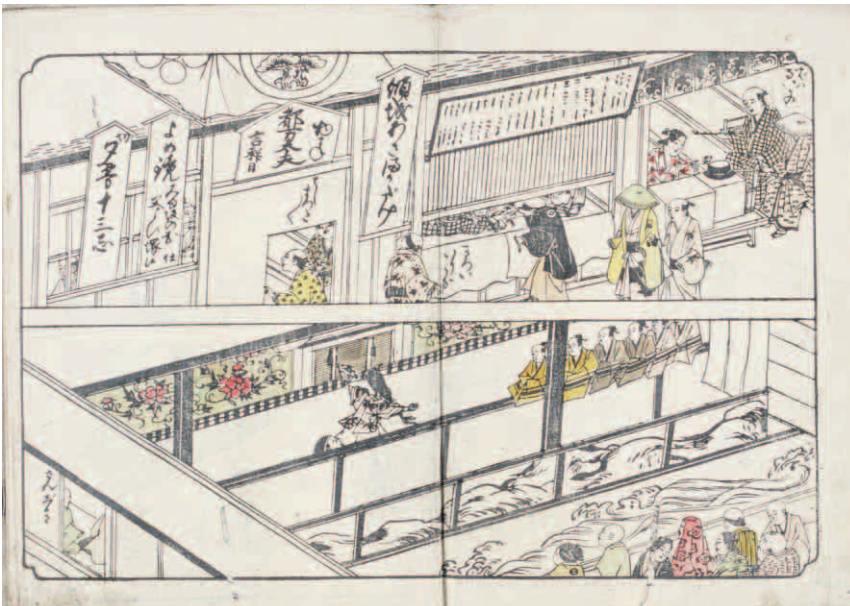
〔四条芝居體〕

（上段）

ばはないかの きついりかな はしまつたく

（下段）

さんじき



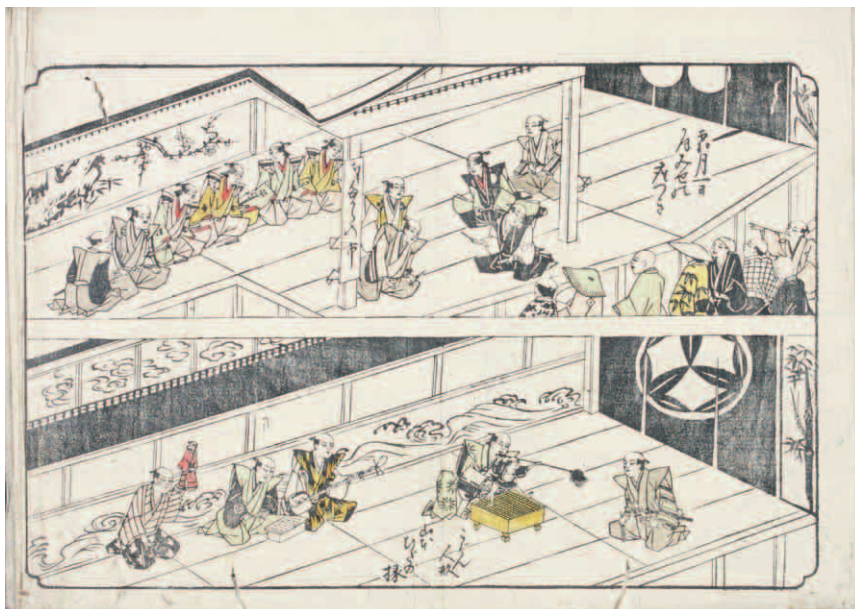
「四条芝居體つづき」

(上段)

霜月一日かほみせの座つき

(下段)

こばん人形 山本ひだの掾



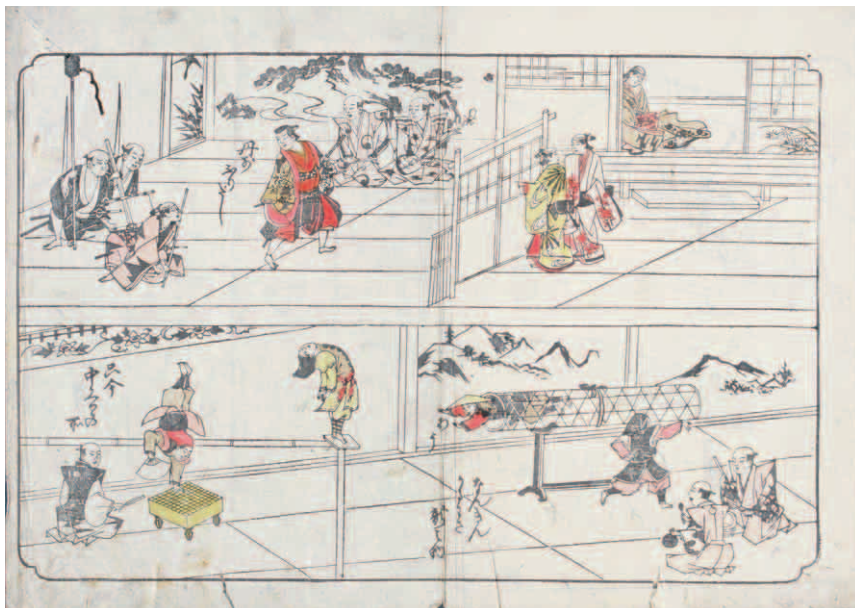
「四条芝居體つづき」

(上段)

丹前ふりだし

(下段)

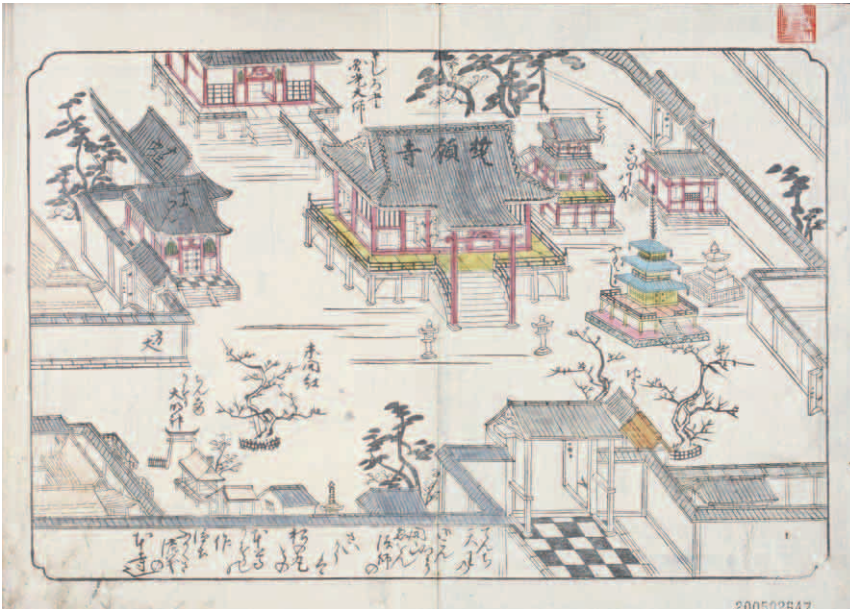
なんきんかるわさ龍(ママ)の物
只今中かえりの所



【十二之卷】

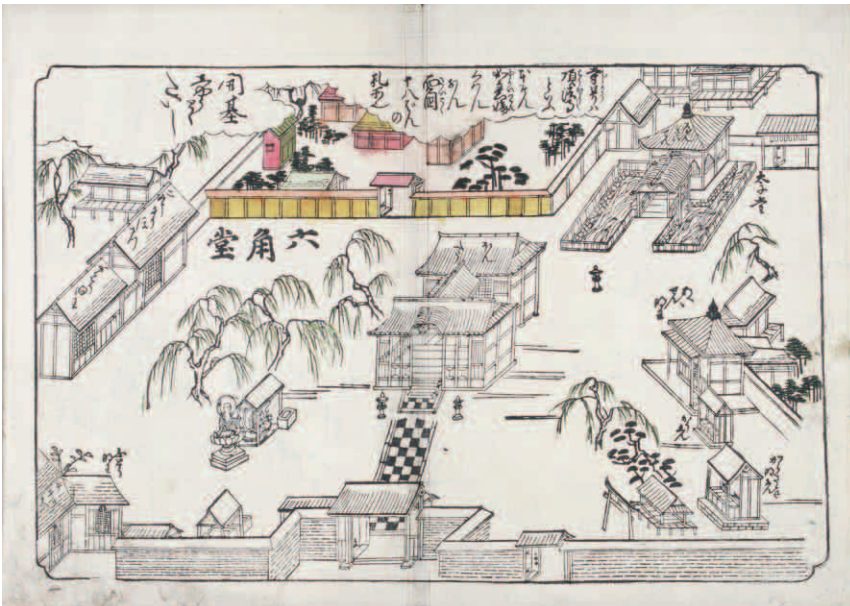
【誓願寺】

てんち天王の御こんりう開山をん法師のさいかうは松の丸との本尊かすかの作浄土ふかくさ流儀の本寺也



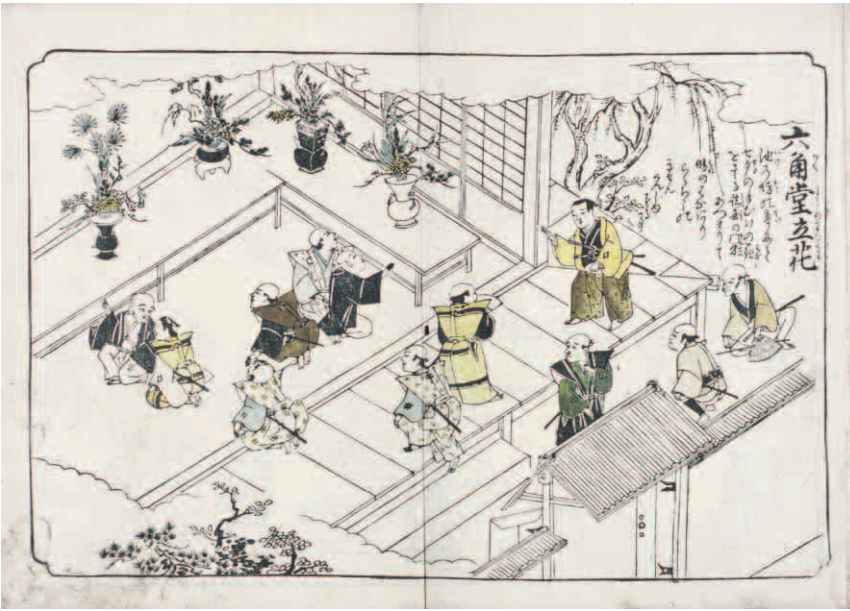
六角堂

寺号は頂法寺といふ 本そん如意輪くはんおん西國十八ばんの札所也
開基しやうとくたいし



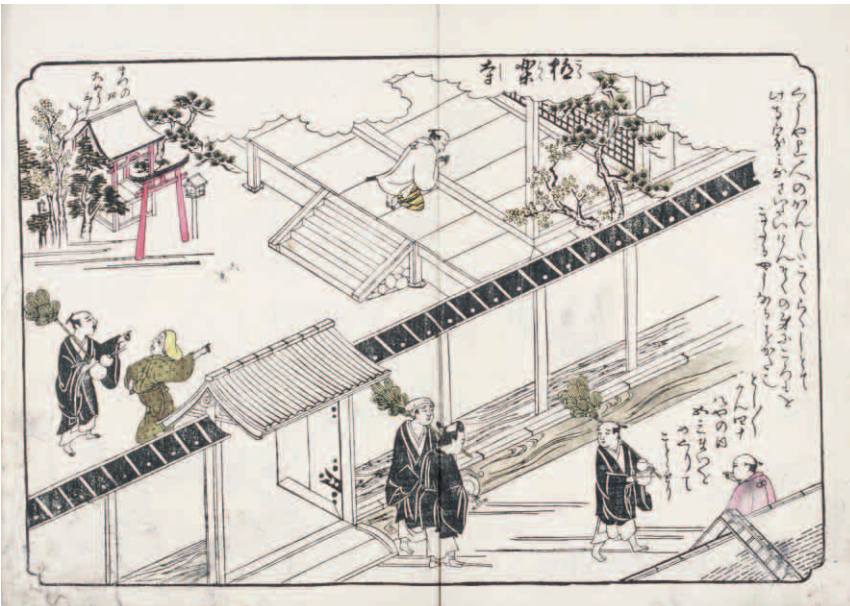
六角堂立花

池の坊の亭にて七夕の手むけの花をさゝる
諸国の門弟あつまりて晴のはなあり
らくちうのきせんくんじゆする事也



極楽寺

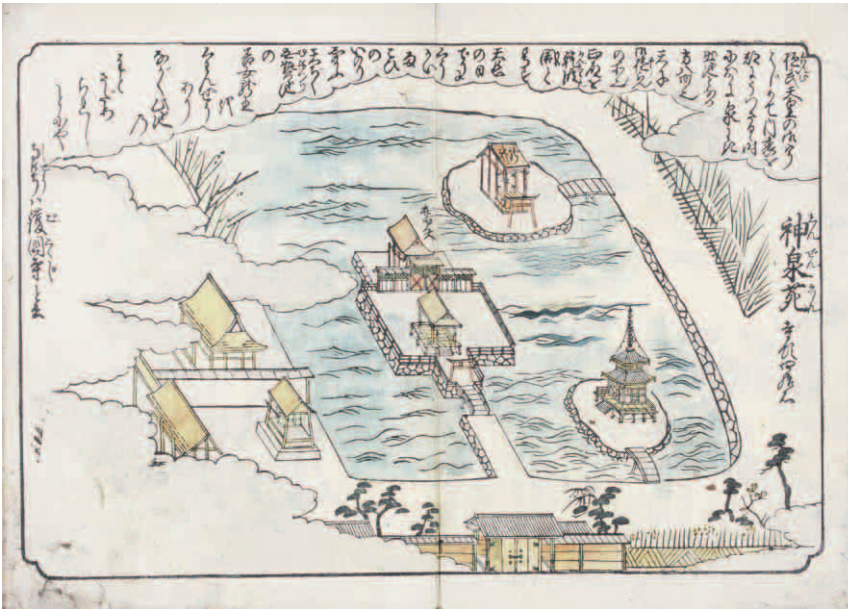
くうや上人のほんしはこくらくしとて此寺家みなさいたい
けんそくの身にころもをきたるやうなるすかた也
としくかん四十八やの内五三まいをめくりてことせり



神泉苑

寺領四拾石

桓武天皇の御宇はじめて内裏を都にうつさるゝ時にはかに
泉わき出池となる方八町也 天子御遊らんの所也
正殿を乾臨閣と号す天長の日でりにくうかい雨こひのい
りし給ふ天づく無熱池の善女龍王をくわんぜうあり なが
く此池の主とさだめられしことかや 寺号は護國寺と云



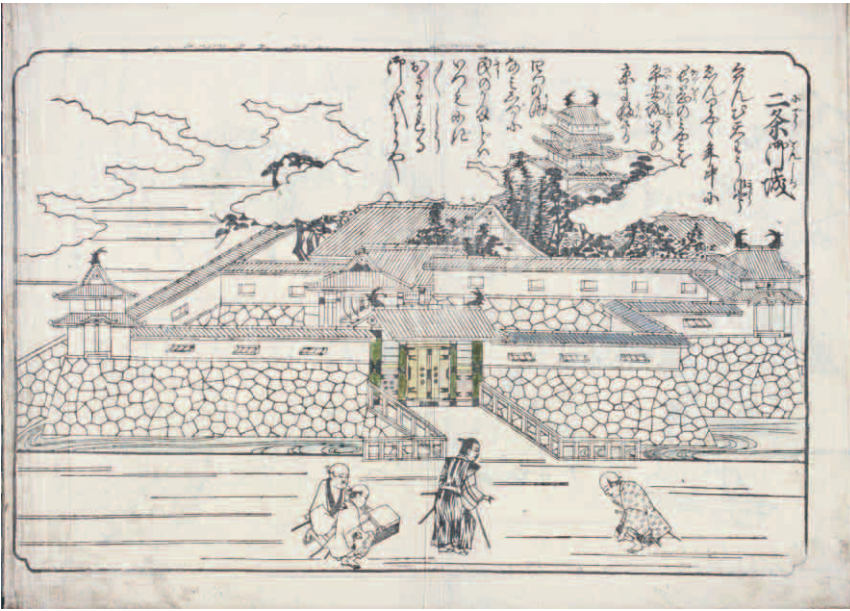
五位鷺

むかし天王御遊覧ありし時鷺のむれゐたるを御らんし六位を
召し あの鷺とつて参れと有し時此鷺飛さりしかは六位せんか
たなくちよくでうなるそ帰れとあればおり立て人にやすくと
とられけるを御覧し御かと御感のあまり五位の爵を給はりしよ
り鷺をこいさきと名つけたり



二条御城

くはんむ天わう御宇ゑんりやく年中に長岡のみやこを平安城
いまの京に移さる
四つの海なみしづかに民のかまどはいつもにぎくしうおさ
まれる御代とかや



〔武家礼儀〕

(上段)

御さき御とうくそれくのきりやうをみかきおのくの
御やしきより大下馬までのきやうれつ
あらたまのはるはひとしほわれ一とはいくく
おさきはやくまいれといかつらしくいふもおちつきたる
ふしのことなるへし



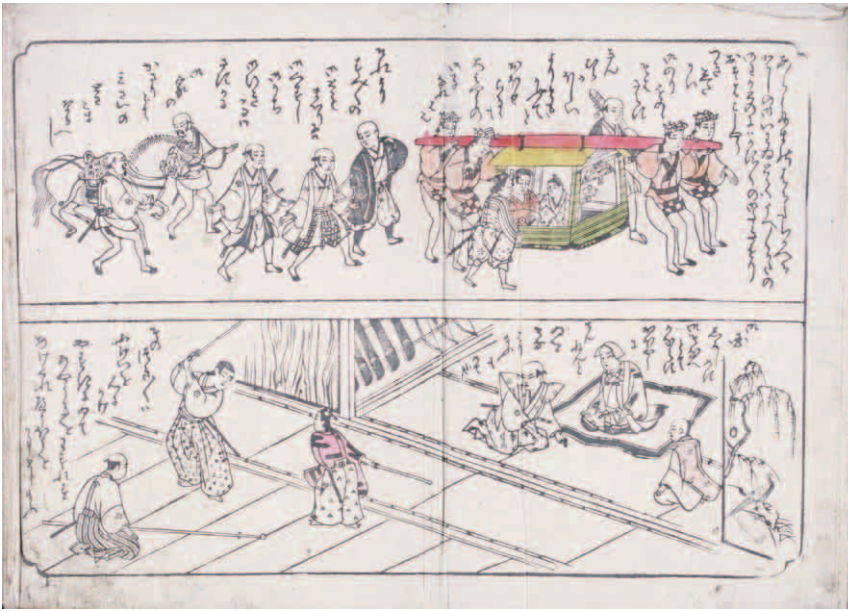
(下段)

御なきなた一
系たまんなか
をふつてゆく
よりはやこれ
こそとのよと
ちいもはも
めをほそくし
てのそきたか
る
さなから御國
からうと見え
て物ことしと
やかに御手を
出さるゝも
ひとしほの御
はうひ也
ししやはそれ
くの家にお
うしてくらい
をとるといへ
とも礼をわす
れず

「武家礼儀つづき」

(上段)

あらたまのはるはたちかへるとしのいわるとてうへくかたの御わかとのにはかすくの御たきもりおそばこしやうつきしたかい御のりものゝそはさらす きんひらかほしいよりともかふてとおほせらるゝも大みやうの御子なれば也
それよりすへくの御ともまはりには御くすし御かち御ひきたるは



さすかに御家

のかさりとて

三さいのとき

こまなるへし

(下段)

御國しろしめ

す御そなへと

てかならすお

ほやうにてん

ねんとゐをそ

なはり給ふも

めてたし

そのつきく

はふけいを心

にかけやすき

にあてあやう

きをわすれす

あけくれやう

ほうを事とし

給ふ

「武家礼儀つづき」

(上段)

おくからうはよろつにものなれてなるほととしよりて人のよしあしを見わけりひをよくおもひしりたしかよしと也とのゝ御心おほくはこれになる物なるへし
御ともまはりもとしよりのたんなもちたるはすみひけも物のいらぬやうにちいさくしてあせもかゝぬやうにたしなむ也



(下段)

やりなきなた

のけいこある

ひはものゝく

かためめんを

かつくもけい

この一つ也

ゆみはわかて

うのむかしよ

り第一のもて

あそひふした

る人のまつな

らふものなり

とそ

【十三之卷】

上御霊

社領九十石余

第一吉備聖灵 第二崇道天皇 第三伊豫しんわう 第四藤原大夫人
第五橘大夫 第六藤の太夫 第七文の大夫 第八火雷大神
右八所也

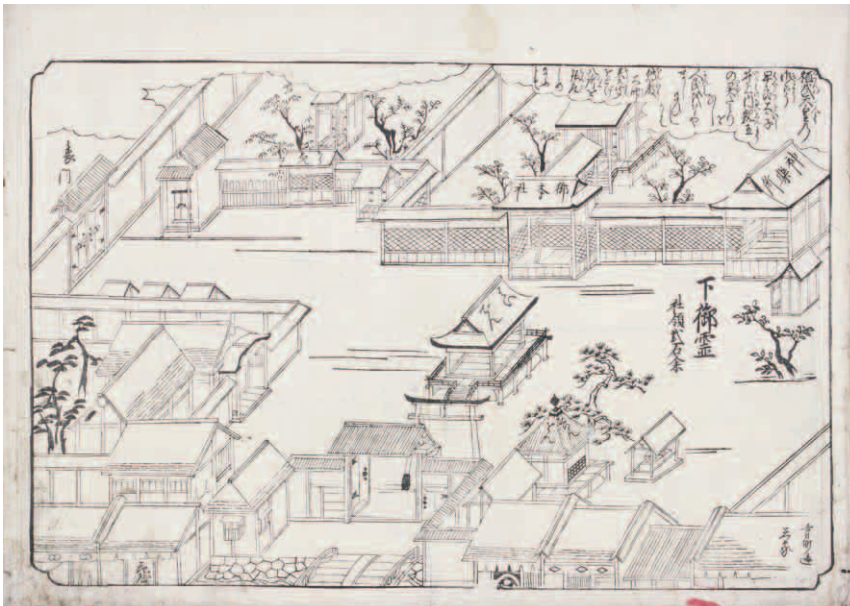


上御灵に二座
下御灵に一座
也 残五座は
洪水にながれ
西の岡にちん
ざと云々

下御霊

社領貳石余

桓武天皇の御宇早良太子井上内親王の灵たゝりをなし人民をなや
まし給ひしかは傳教大師奏聞をとげ八所を鎮座しめ給ふとそ



御霊祭禮

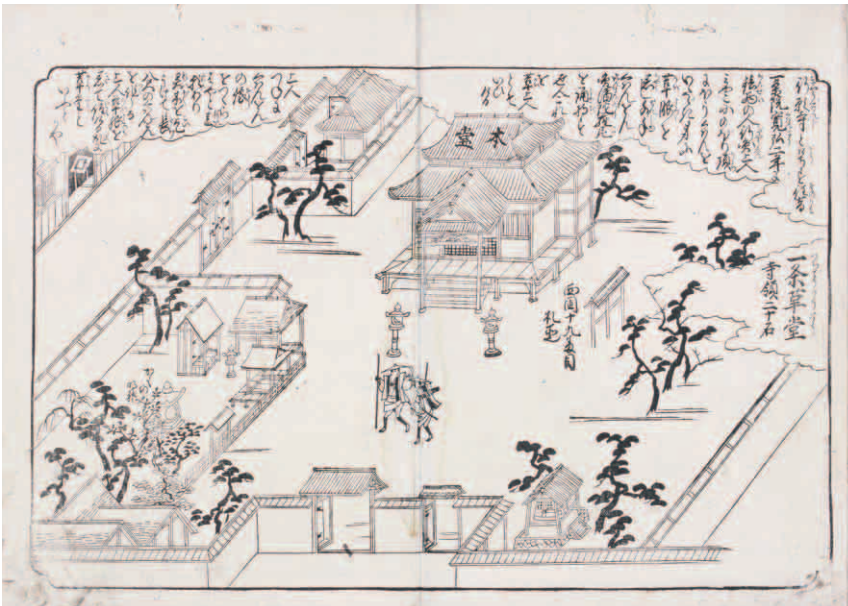
中京は此御神の葉すへ也 御神吏は中の秋中の八日櫛につけし
猿多彦の面を俗にいへる王の鼻のたかきもいやしきも
惣て神拜の色をなすとかや



一条革堂

寺領二十石

行願寺と号す 往昔一条院寛弘二年に鎮西の人行圓上人みやこにのぼり
頭にほうくはんをいたゞき身に革服を着し千手くはんをん圓滿陀羅尼を
誦持す 世人これを革上人とぞいひける
上人つねにくはんをんの像をつくらはやと念願あり
霊木を乞うけて長八尺のくはんをんを作らる 上人革服を着て住みける

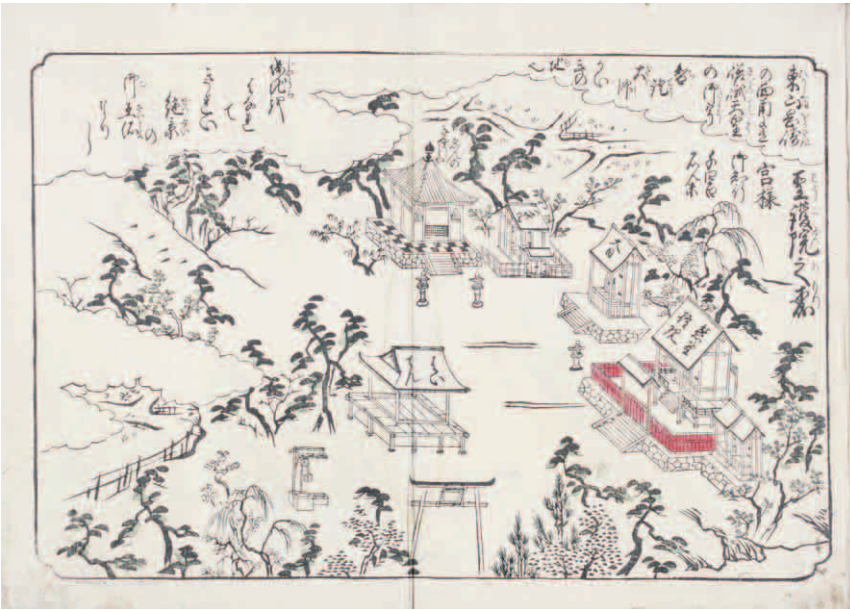


故に革堂といふとかや

聖護院之森

宮様御知行千四百石余

東山岡崎の西南に有 嵯峨天皇の御宇 智證大師かいきの地也
城地をはなれてきれい絶景の御在所なりし



山伏峯入

(上段)

御斧 御笈 御なきなた
これより諸国のやまふし おなしく年行事



(下段)

山ふし補任の
大せんたち壹
人に ともま
はりさきて六
人 こしそへ
ともまはり十
二三人もあり
若王子大僧都
住心院大僧正
伽耶院権僧正
圓了院大僧都

「山伏峯入つづき」

(上段)

これよりくくの年行事六十人 たたし一人に供六人つゝ、

(下段)

坊官 岩之坊法印

坊官衆六人馬上



「山伏峯入つづき」

(上段)

御先手山伏衆

御圖伽桶持

御門主様



(下段)

高野山蓮華定

院

いづれも騎馬

薩摩蓮光院

御押

【十四之卷】

万年山相國承天禪寺

寺領千八百卅石余

後小松院御宇明德三年の草創尊氏將軍三代義満公御こんりうにて夢相國師くはんじやうのところ也



具足山妙顯寺

寺領一石

後圓融院の御宇建立 らくやう法花廿一ヶ寺の第一也
開基日像上人 さいかうは加賀の國司黃門利光卿
中ごろ三十番神の事をよしたの兼俱がたづねしを當寺日具上人
返答あり かねとも大きにかんじけりといふ



龍乃口御難

弘長元年五月十三日平の重時が謀として相州竜の口にて誅せらるへしとて敷草に座せしめける時日蓮心中に題目をとなへ給へば天俄にかき曇り辰巳の方よりしんとうらいてんすさましくひらめき太刀を段々にくたき眼くらみたましるをけす

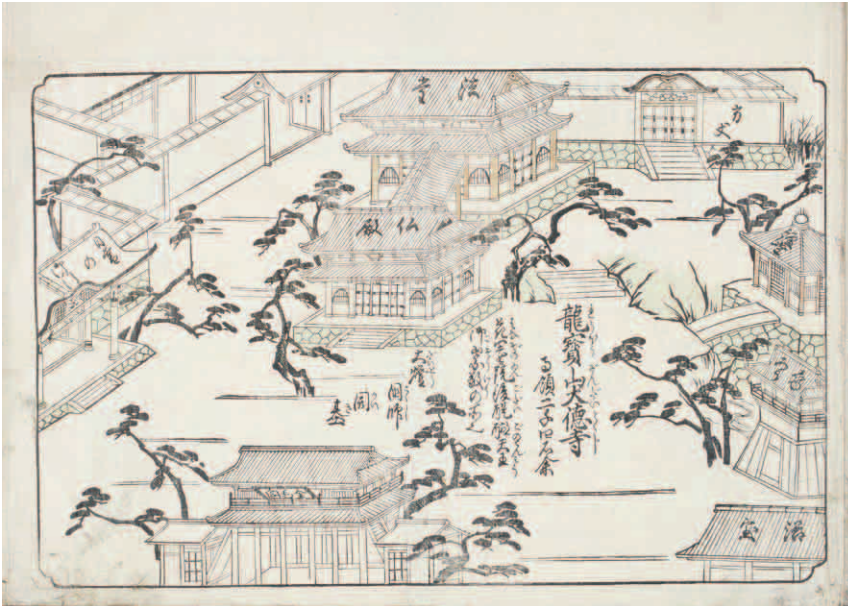
けいこの武士も落馬せしかは相模の守大におとろき上人の死罪をなため給ひけり其後宇多の院の御宇壬午十月十三日武蔵國池上左衛門太夫宗

仲か家にて遷
化御年六十一
才也



龍寶山大徳寺

寺領二千四石余
花園院後醍醐天王御崇敬の所也
大燈國師開基



〔禅僧〕

そうしてせんしうはほんらいむ一もつといふをさとりて
めてたきになつますかなしきをなけかすほとけをさと
そしをさとのふかきならいありとそ



大宮の森

やすらひはなといふ事 むかしさくらまちの中なこんといひし
人としことのはるさくらのあやなくちるをおしみ給ひていまみやは
やくしんたちゆへに御いゑの子をつかはし給ひてさまくきせい
ありしかはよその花よりはちる事おそくして廿日かあいたさかり也
けりとそ 此ゆへにやすらひ花とは安楽花と書とかや



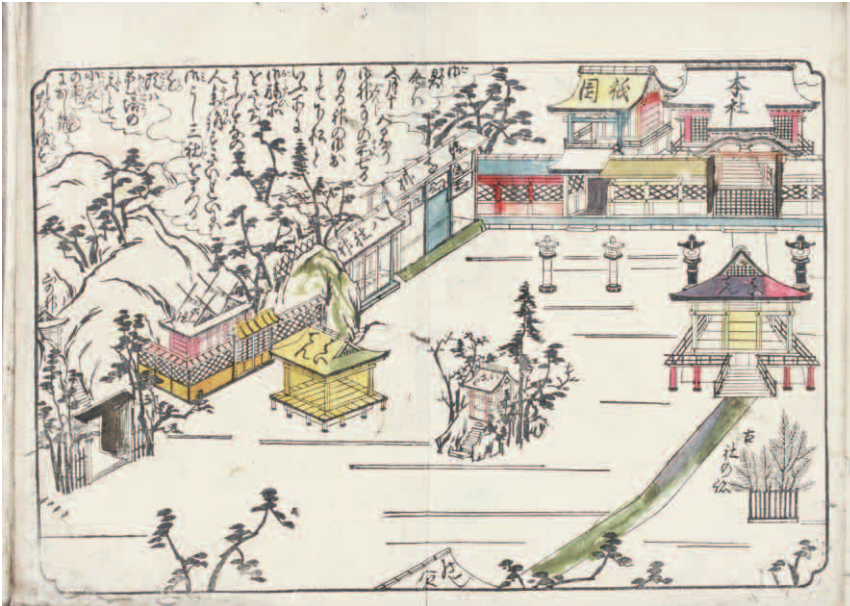
今宮

一条院御宇正暦五年ゑきれいはやりてらく中らく外の
人おほく死してさはがしければ御霊會を舟岡にまつりぬ
又疫はやりて京都しつかならざりしかば此所に社をたて
鎮まつり神馬をまいらせて今宮と号し御霊會をはじめ
おこなはる



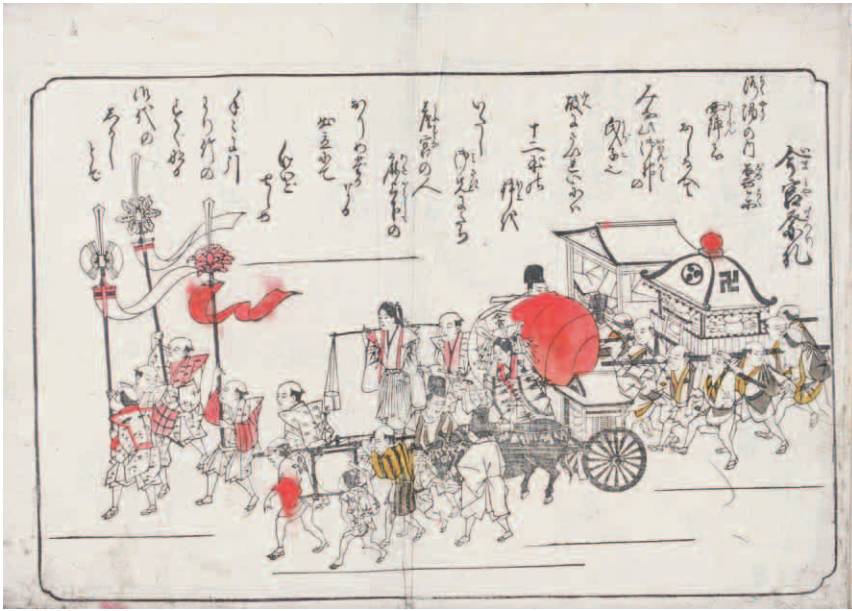
「今宮つづき」

御霊會は五月十五日なり御神事の前七日の間神の御出とて下松といふ所
に御旅所をさだめうぶすなの人参詣すさいれいには御こし三社をまつる
近頃は愛塔の宮とて小庇の車に出し絹してまつり渡す



今宮祭礼

洛陽の内聚樂西陣はおしなへてみな此御神の氏子也
故にさいれいには十二基の鉦をいたし御先にたち
座宮の人 麻上下のおりめだかなる出立にてけいごせしめ
手ゝに引わり竹のすぐなる御代のしるしとぞ



七野社

若宮春日明神と号す みやこの北に七野あり其惣社として
祭る御神なるゆへか
七野とはいわゆる内野 北野 萩野 蓮臺野 紫野 上野
平野なりし



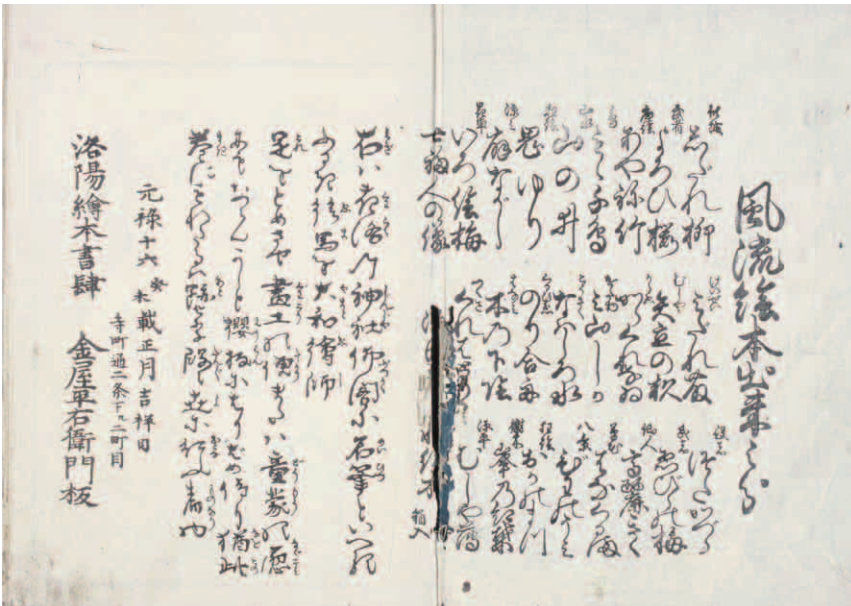
光明山引接寺

當寺念仏は此寺の桜さき次第に初る狂言の次第は壬生に
おなし 龜山院の御宇文永年中に如輪上人はしめ給ふ
開基は定覺律師 閻魔王は定朝作 寺領五石



【十五之卷】

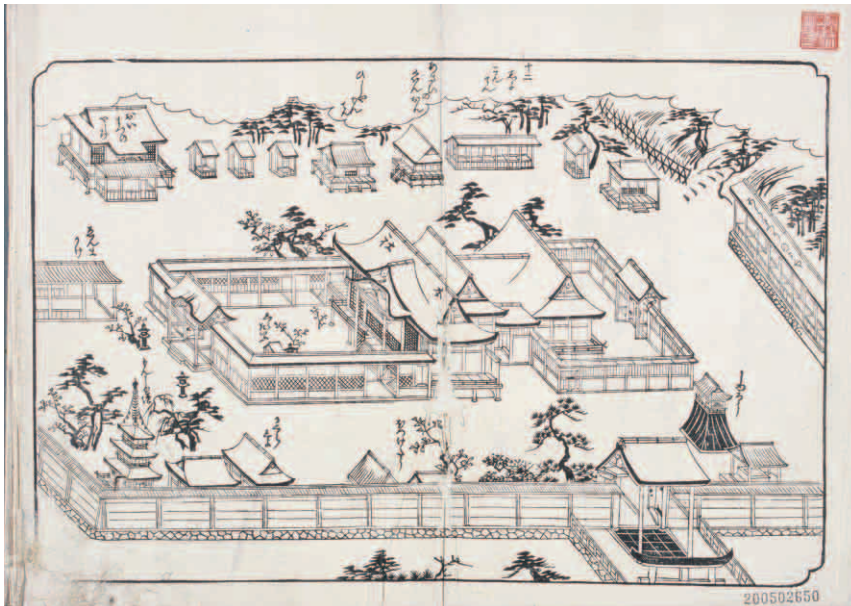
(翻刻文次頁へ)



風流絵本出来之分

傾城しだれ柳 けいせいみだれ藤 役者つたかつら
 武者よろひ桜 むしや矢立の杉 武者ゑびらの梅
 唐絵あやね竹 からゑからくれなる 仙人高麗きく
 鳥もゝ千鳥 けた物み山しか 草花はなくなるま
 山水山の井 とうさくなはしろ水 八景びわのうみ
 狂絵鬼ゆり くるひゑのり合舟 狂絵おかのみつ
 涼み扇ながし はなみ木の下陰 樹木峯の紅葉
 花車いろ絵梅 いくさくれはとり 源平むしや薄
 七福人の像 (虫損につき判読不能) 繪本箱入
 右は花洛の神社佛閣に名筆といへる
 ふるき絵馬を大和繪師
 是をとめさせ畫工の便または童蒙の慰
 にもならんかと櫻板にちりばめ侍り猶此
 巻にもれたるは跡祭段々世に行ふ者也
 元禄十六癸未載正月吉祥日
 寺町通二条下ル二町目
 洛陽繪本書肆 金屋平右衛門板

〔北野社〕



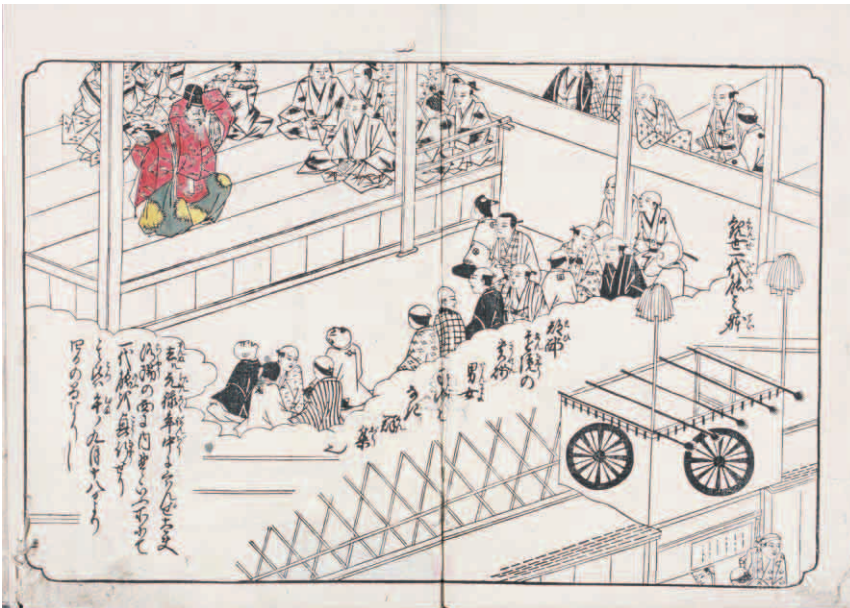
北野社

天曆くはんねんはしめて菅丞相の霊を此ところに
鎮座なしたてまつる
社領五百八十石余
ひかしむきのくわんおん



観世一代能之躰

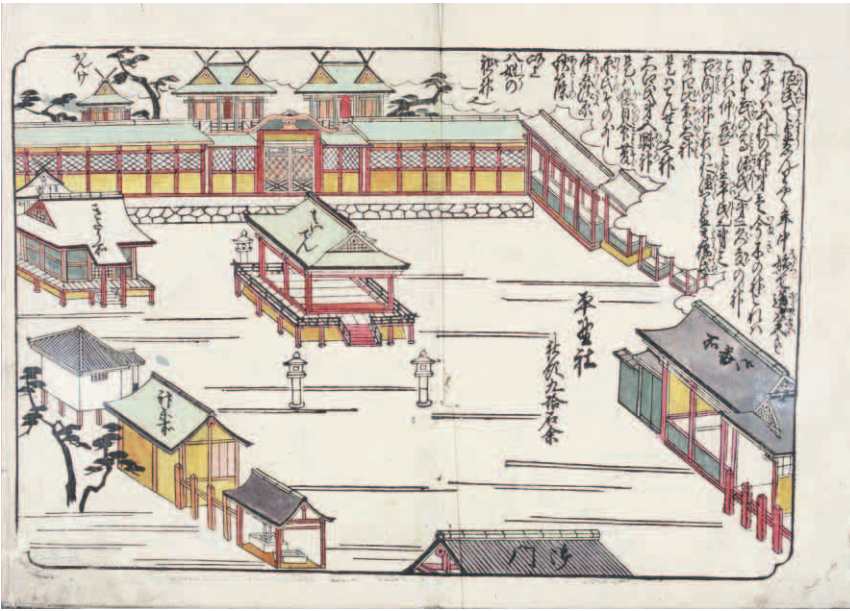
都鄙遠境の貴賤男女寸地もなき群集也
去ル元禄年中にくはんぜ太夫洛陽の西に内野といふ
所にて一代能を興行せり
其比は午ノ九月十八日より四日の間なりし



平野社

社領九拾石余

桓武天皇系なりやく年中始て造営す 平野は五社の神
第壹今来の神これは日本武の尊源氏也 第二久度の神これは
仲哀天皇平氏也 第三古閑の神これは仁徳天皇高橋氏
第四比賣太神是はてんせう太神大江氏 第五縣神是は穂日
命菅原氏 その外中原清原秋篠以上八姓の祖神也



鹿苑寺

寺領三百石余

後小松院御應永四年源義満將軍のこんりう也 薨じ給ひて
のちすぐに御ぼだい所となれり然によしみつこう此地に閣を
たて金ばくをぬり前に大きな池をほらせ絶景いふはかりな
し金ばくぬりの閣によつて金閣寺とは名付けたり



等持院

寺領四百二十石

後光嚴院延年中に源義詮將軍こんりう



龍安寺

寺領三百九十九石

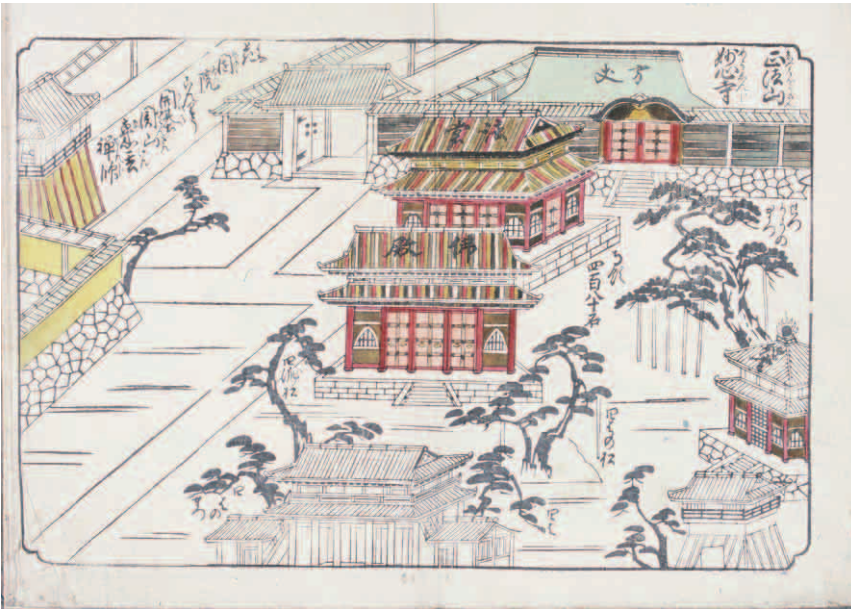
細川勝元こんりう開基は義天和尚也とかや
春過夏たけ秋くれて四方のながめもうとき木枯のくれるは
此池の鴛鴦見とてみやこの遊人袖をつらねてにぎあふとそ



正法山妙心寺

寺領四百八十石

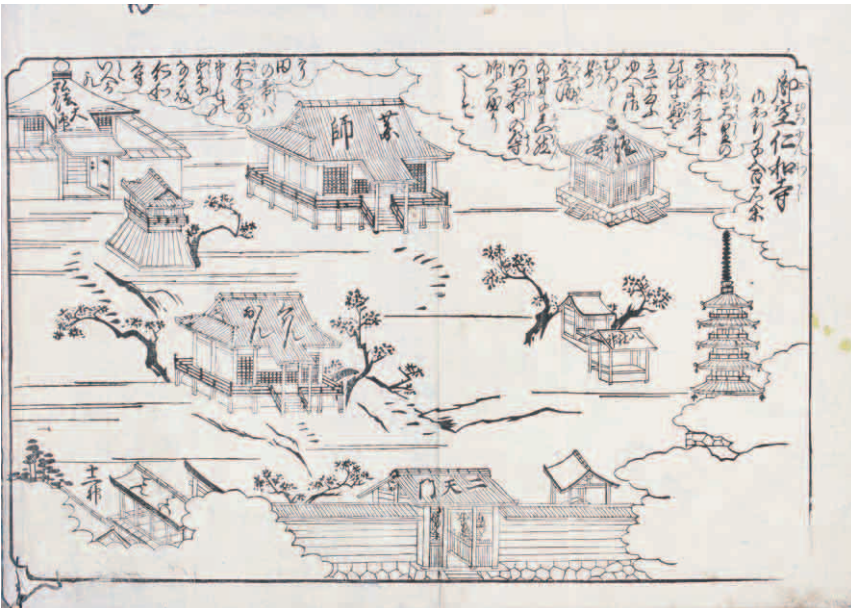
花園院ごんりう開基開山惠玄禪師



御室仁和寺

御知行千五百石余

宇田天皇の寛平元年此地に室を立たまふゆへに御むろと号
空海の弟子真然阿闍利の導師くやう也とぞ
宇田の帝は仁和帝の第七の皇子なる故仁和寺といへるよし



JOSHO

BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN



佛教大学図書館

＜後記＞

本年度当館は池見前館長に替わり、新しく教育学部より山崎高哉館長を、瀬澤前図書課長に替わり、徳森京子図書課長を迎え、そのもとに館員一同あらたな気持ちで図書館活動に励んでおります。
また今年度は志麻克史専門員が佛書を主たる担当業務とすることになりました。

常 照 — 佛教大学図書館報 第55号

平成19年3月1日 発行

編集・発行 佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL 075(491)2141

FAX 075(493)9042

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/>